

金先生から韓国青年招へい事業において、韓国青年代表団が日本において1ヶ月のプログラムのお世話になっていることについて感謝のお言葉を戴く。

そして帰国青年からも報告される有意義な日本理解のプログラムであることの報告が、局長の立場として報告された。

日本側から三年間行ってきた中での本プログラムの意義、そして日本青年の反応等を報告する。日本と韓国の青年交流の重要性を確認した。

尚、金局長との会談後教育部社会国際教育局社会教育振興課長 梁 在君氏、権 赫來氏、金 南一氏、金 義鎬氏と共に韓定食を戴く。本席では国際理解の話を相互に話合う

③ 1月31日(木) 於：藝苑學校(ソウル藝術高等學校併設・中學課程)

韓国の新学期は、3月から始まるため生徒は、特別講座を受ける以外登校していなかった。

校長の高先生から歓迎の挨拶を受けたのち、学校の概要説明を聞く。

1953年 ソウル藝術高等学校設立

1968年 中学校課程創立

1975年 高等学校を移転し、中学校課程のみ敷地内にのこす

私立学校として小規模教育が行われており、1年～3年生まで各学年数300人合計900人の生徒数で、それぞれ音楽科には、フルート、ハーブ、ピアノ、声楽、ホルン、トランペット等が設けられ、美術科、舞踊科には、バレエ・韓国舞踊があり、在校生のほとんどは女子学生で僅か全校で33名の男子生徒がいる。教育課程で学ぶ科目は、他の学校と同様であるが、違う点は特別活動が専攻別に集4～6時間行われていることである。

40人の教職員の他に、数多くの講師をかかえており、音楽関係だけでも200人の講師がいる。

1クラスは、人数が多く、20坪に60人の生徒がいるが、今年の新学期からは50人に減らされる。参考にソウル市内の公私立の平均1クラスの人数は50人である。しかし、この学校の特徴である特別活動になると、10～15人の規模で指導され、音楽などは個人指導が多い。

この学校の卒業生の70%は、この学校の高等学校へ進学し、10%は他の芸術学校へ進学する。その他は一般高校へ進学する為、100%進学率である。

大学も将来設立する予定である。

中学校の入学試験は、国語、算数、理科、社会で50%、専攻科目の実技試験で50%評価する。

レベルの高い芸術指導をしており、発表会も色々な形で行われている。クラス内発表会、梨花女子高等学校ホールでの発表会、開校記念日の発表会等、舞踊科の生徒は国立劇場小ホールでの発表会もあり、美術科の作品展は1ヵ月いつも展示される。この様に、一般中学校と違い技術を磨くための練習が大切な為、生徒は大変忙しく、又自分の目的意識をしっかり持っている者が入学していることもあって学校内の問題は全く見当たらないと言うことであった。

現在の問題としては、教育熱が盛んな為、進学問題が一番大きい。

私立の場合、財源が乏しいため、義務教育である中学校までは、将来的には90%が公立になるだろうという予測。

現在、ソウル特別市の私立学校に所属する生徒は中学生で30%、高校生50%、専門学校生70%と言われる。

この先生の話では、日本の現在の問題が5~6年すると韓国でも起きると言うことであった。

#### ④ 1月31日(木) 於：学校法人禮一學園

1965年に女子高等学校、女子商科、女子中学、国民学校、幼稚園という総合学園として設立した私立学園。最初、理事長室とつながっている応接に通されたのですが、その部屋が余りにも立派なので驚きました。まるで一般企業の社長の使用される応接室のようでした。初め、理事長・高等学校長の金先生、中学校長小学校長を交えて懇談会をしたのち、学校案内のスライドを見せて戴き、学校の施設を幼稚園から高等学校まで見学させて戴きました。

この学校は、有名大学合格者を写真要りで廊下に貼ってあり、成績上位者も貼り出していました。いかにも受験校という感じでした。

また私立校ということもあって、設備もLL教室、コンピューター教室、ピアノ教室など、しっかりしていました。1クラス60人学級です。韓国では、幼稚園から高等学校までの一環教育という制度がゆるされていないので、それぞれの学校が同じ敷地内にあるという状況で、幼稚園から高等学校まで通してのカリキュラムを組むということとはしていないようでした。ただ、全ての教育方針は統一されており、敬天、愛国、愛人を通じて理想の人間像を確立するという教育理念を持って生徒を指導している。

校長室、教頭室には、必ず国旗と盧泰愚大統領の写真が、教室には国旗が必ず掲げられているのが印象的でした。これは藝苑学校も同様でした。

また、理事長の方針で職員室の教員の机の上には書類等何も置かない、作業をするときのみ机の引き出しや各自の棚及びロッカーから道具を出すということが徹底されており、私たちが見学した際には、休み中で誰もいなかったため、どの職員室もただ

机が並んでいるだけという整然としてすっきりしておりました。

日本ではなかなかこれを徹底させるのは難しいことだと感じました。

教員は生徒の模範たれ、という精神で教員教育もしっかりしているようでした。

この学校の特徴として、毎年日本の高校生を受け入れていることです。細田女子高等学校と高校生の短期交換留学を行い、両国の理解を深めて交流を続けているようです。校庭にチマチョゴリと着物を着た二人の女子学生が手をつないでいるブロンズ像が立っており微笑ましかったです。

⑤ 2月1日(金) 於：韓国青少年聯盟

韓国青少年聯盟は、体育部に属し、總裁 金 博士は医師でもあり、韓国を代表する要人である。日韓議員連盟の中でも相互理解推進の第一人者としても活躍された。

韓国青少年聯盟の活動は次ぎの様に発展してきた。

1981年3月 韓国青少年聯盟設立

1982年 学生活動開始

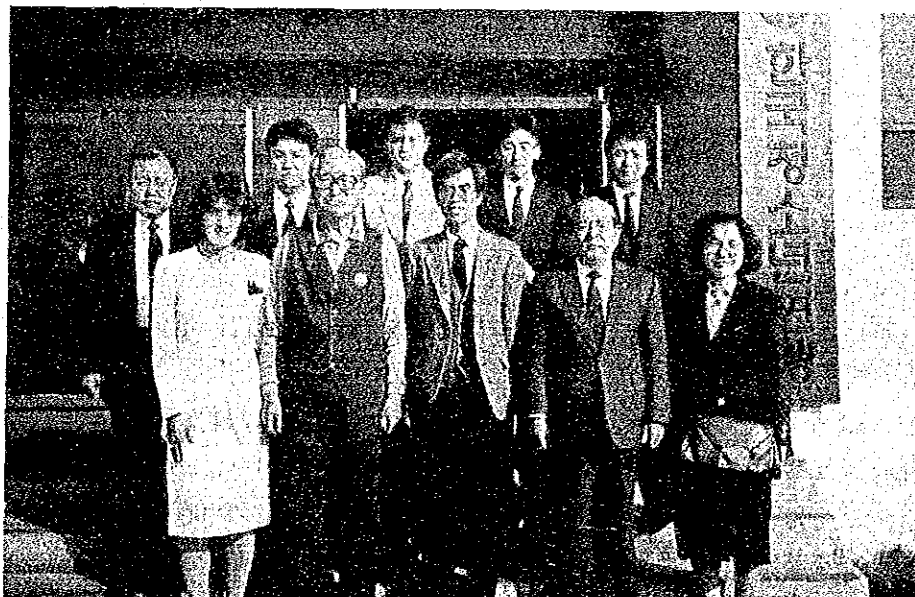
初めて勤労青少年厚生福祉センター開設

1983年 カウンセリングの開始

1984年 外国人代表団の活動開始

勤労青少年の活動開始

1986年 本部移転



韓国青少年聯盟は、非営利団体の財団組織で、青少年の健全育成にあたり、青少年は自由に団体・個人加入することが出来る。理想的な青少年像を掲げ、六つのモットー（責任、創造力、愛国心、奉仕、協力、独立心）を柱に活動に取り組んでいる。会員制活動として、年齢別に次の様になっている。

アラム（幼・小学生）

ヌリ（中学生）

ハンヨル（高校生）

ハンウール（大学生以上）

ボラム（勤労青年）

主に行われている研修プログラムは、

精神教育

生活教育（伝統・習慣を通して）

文化伝承

愛国心を養う

スポーツを通しての研修

指導者養成の研修

技術習得講座（音楽・技術・芸術）

国際交流プログラム

地域社会への奉仕活動

大会等への参加

全国に15の支部を設置し活動の輪を広げている。

### 3-2 帰国青年同窓会等の活動状況

韓国では未だ帰国青年同窓会の組織作りがなされていないのが現状である。

そう言った状況のなかで、今回の調査で関わったグループは学生が主だったので学生間の同窓会組織を中心にその活動状況報告になります。

1990年度の招へいにおいて31名の韓国の学生が日本を訪問したわけですが、韓国においても様々な地方より代表として集まったため、全員が一同に会する機会と言うのは難しいようです。1990年度の学生は帰国後、大学休み中に2度集合する機会があったと話していました。その中で1990年度学生団の韓国内での中心となる議長を選出したと言うことでした。しかし、それが韓国の同窓会組織としての中心的機能の役割を果たすことは大変難しいと思われる。学生だけでなく、教員、青年指導者等の帰国青年の同窓会組織の年度毎のものと思われる。

1990年度の学生グループの様子から判断すると、教育部からの団長は窓口となって

学生に情報が流れるという状況であった。また、年度を越えての、つまり1988年度、1989年度、1990年度という年度を縦に繋ぐ情報交換は無いようであった。

今回の調査団の訪問に関しても、90年度のウソル近郊の学生には、情報が伝わったようですが、地方及び88年度、89年度の学生までには届かなかったのが現実の様で、組織だった同窓会活動は今後の課題であると言える。

年度を越えて、このプログラムを体験した者が集い、さらに日韓の理解を深める組織が出来ることを願いたい。

### 3-3 帰国青年との意見交換会

今回のプログラムではセミナーに変わり意見交換会が実施された。

2月6日(水)に行われた意見交換会は、1990年度の韓国学生代表団の団長学生代表4名、教育部の金氏、通訳、そして日本側5名で、帰国後の様子や本事業への率直な意見や感想をお互いに意見交換を行いました。



その中で、

「最初の1週間(共通プログラム)における教授の講義での質疑の時間が短すぎる。」

「最初の1週間(共通プログラム)における講義での通訳の人数不足を感じた。非常に理解しにくい場面が最初の1週間にあった。」

「日韓関係を日本側の視点から見る講義が多かった。韓国側の視点を含めて客観的な

見方でのものをもっともとめる。』

「1ヵ所での見学時間をもっと長くして理解出来るようにして欲しい。」

「所々で親切な対応に会い、特に問題はなし。」

「日本の青年との交流の時間をもっと長くして欲しい。」

「山中湖（合宿セミナー）とホームステイは大変有意義であった。」

等が韓国側から寄せられました。

意見交換会は予定時間を延長して行いました。

## ② 帰国青年との交流会

帰国前日の2月7日（木）瑞麟ホテルにて17：00～20：00実施する。

交流会の流れは：

日本側チームリーダー白井の挨拶に始まり、韓国側90年度学生代表団団長の權赫來氏の挨拶、韓国側学生代表金氏の挨拶、日本側学生として日野が挨拶をし、牧野の乾杯後、歓談・食事をする。日韓相互で歌の交換を行い、最後に日本側よりお礼の言葉とプレゼント贈呈をし、参加者全員で記念写真をとる。

夕食はコースの料理で用意されていましたが、途中から参加者それぞれが席を移動し和やかな雰囲気で行われた交流会でした。

合宿セミナーの交換会、韓国青年の離日前夜のサヨナラパーティから続いているかの様な思いでした。

もし出来れば、ホームステイのホストファミリー1989年度や1988年度の参加者にも出席して戴ければ最高の交流会になったと思うと残念であった。

出席者

韓国側：徐 仁愛氏（教育部社会国際教育局）

金 義鎬氏（教育部社会国際教育局）

權 赫來氏（1990年度韓国学生代表団団長）

洪 大榮氏（1989年度韓国学生代表団団長）

1990年度学生代表として

朴 炫貞氏（梨花女子大学校）

李 炫樹氏（慶熙大学校）

白 盛旭氏（韓国外国語大学校）

金 倫氏（建国大学校・大学院）

李 在祥氏（成均館大学校）

吳 南錫氏（延世大学校）

1989年度学生代表として

黄 云喜氏 (西江大学校)

崔 貞玉 (通訳)

日本側：白井 千里チームリーダー、田中 克典、日野 徹

牧野 雄、西 忠雄



### 3-3 ホームステイ実施状況

#### ① 白井 千里

ホスト：尹 鍾學氏 (Yun Jong Hak)

ソウル産業大学・工学部長・教授

夫人、子供3人

その国の人々と直接話しをしたり、共に生活する体験のない旅ほど味気ない印象が薄いものはありません。

「百聞は一見にしかず」と言う言葉通り、わずか1泊2日の民泊は、数多くの韓国を知る又、韓国の人々の生活を知る大きな体験でした。毎年、招へい事業のコーディネーターをつとめている時、民泊は、一番のハイライトであり、わくわくする気持ちと少々の緊張感がある事は、青年達を見ていて理解していましたが、韓国での民泊は、私にとって初めての体験だったせいか、非常に期待していました。私の滞在先は、ソウル産業大学工学部教授の尹(ユン)先生の家庭で、賢夫人の白 賢實そして美しく、優秀な三人の

娘さんがおられました。二人の娘さんは、ソウル大学の学生で一人は、高校生。尹先生自身も夫人も海外生活や、旅行の経験も多く、日本にも何回も訪問しておられ、居住もソウルオリンピック公園の近くにある、現代アパート（高級住宅街）で、欧米と変わらぬ生活スタイルでした。4LDKの住居は、約150㎡で、セントラルヒーティングで暖かく、床暖房は快適です。

尹先生は、英語も日本語も大変お上手で三人の娘さん達も一生懸命、英語を使って話してくれました。私がこの家族にとって、初めての外国の客人だったということで、少し皆、緊張して迎えて下さったのですが、三人とも、母親を手伝い、料理などとても上手で、よく気がつく聡明な娘さん達で、皆自分の将来を見すえて進路をとっていると思いました。韓国の教育熱のすごさは、日本以上ですが、この三人娘を見ていると、生来、もっている良さが引き出されのびのびと、そして優しくしつけられ楽しく生活していると思います。

尹先生も奥様も五十代ですが、とても、家族を大切にし、時々、家族で遊ぶという、伝統的な「ユウ」という（日本で言うスゴロクの様なもの）遊びを夜遅くまで楽しみました。4本の木の表裏の数で駒を進めるのですが、なかなか勝負は、予想通りにいかないところにおもしろさがあり、熱くなって2チームに分かれて楽しみました。

翌朝、私が山が好きだということから、近くにある南漢山城へ行くことになったのですが、岐阜県でいうと、金華山より少し高い標高5百メートルぐらいの山頂に城壁がのこされているというので行ったところ、雪がまだ解けていないところが多く、皆、正装していて、私と夫人は、ハイヒールをはいていたのですが、初心貫徹で、皆でお互いに支えあいながら、山頂まで約一時間話しをしながら、何回を滑って転びそうになりながら二人の大学生の娘さん達と話をしながら登ることが出来、文化、歴史、今の両国の青年のこと、習慣、女性としての役割り、仕事、世界観を話したのです。両国の歴史と教育の違いから彼女達は、本当に今回、私が滞在した事を喜び、私もこと尹先生の家族との縁を大切に思いました。

きっと近い将来、この娘さん達も又、家族も日本を訪問するだろう。そんなときに、私がお返しをさせてもらおう。そしてこの事業を通して、益々、青年達の中で創り上げていく友情を励むため、非力ながら、又、活動を続けていこうと思いました。

名残り惜しい滞在の中で、次回会う時を楽しみに……車は、ホテルから遠く消えました。

## ② 田中 克典

ホスト：李 相遇氏 (Lee Sang Woo)

高校生

両親、姉



僕は、緊張や不安をかくす事は出来なかった。それは、2月2日の夕方から李さんの家でホームステイをするからです。はっきり言って韓国語は、2言3言しか覚えておらず、たのみのつなは、辞書しか無かった。僕にとっては、初めての韓国、初めてのホームステイで心が高なる反面、不安もかなりあった。

4時にホテルで顔合わせ、そして日本から来た4人とも分かれて李さんの家へ向かった。家に行く前にいろいろな所を安定してくれた。南山タワードライブコース、おまけにボーリングまでした。南山タワーから見下ろすソウルの夜景はとても奇麗で、今でも僕の日にはやきついて、はなれません。

僕は、車の中や、いろいろな所で彼らに韓国語や英語や日本語を使って話しかけた。さいわい李相遇さん（息子）は、日本語や英語が少々分かるみたいで、簡単な日本語や英語は通じた。もう一人、金さん（女性）はとても日本語が上手でみんなの通訳になって、いろいろとお話をしてくれました。李さんの友人の金さん（男性）も、ほんのわずかな日本語をしゃべってくれました。でも、会話の相手はいつも金さん（女性）になってしまいましたが、みんなが一生懸命、会話をする事により家に着くまでには、みんなと心が打ち解けて、不安も何処へ行ってしまいました。

家に着くと李さんのご両親が出迎えてくれて、僕は車の中で覚えたての韓国語を使い、挨拶をしました。早速、部屋に案内され、荷物を置くと、すぐに晩御飯が待ちました。おかずの中には、やはりキムチが混じっていた。晩御飯を食べ終えた後、李さんの家族と金さん（女性）と、運転手の韓さんを交えた6人でいろいろな話が始まった。家族の事から仕事の事、世間話などが、とびかった。時計は12時を回り、金さんや韓さんは、それぞれ自分の家に帰った。

その後、僕と李さん（息子）は部屋へ行き、話の続きを2時間ほど語りあった後、僕は深い眠りについた。

僕は翌朝、寝ぼうをしまい午前10時に起きた。その日の朝、李さんのお父さんは仕事で、日本へ行ってしまった。お礼を言い、お父さんを見送った後、李さんと李さんのお母さんと金さん（女性）と前日に逢った李さんの友達の金さんと5人でソウルランド（遊園地）へ行った。楽しかった時間もアツという間に過ぎてしまい、とうとうお別れの時がやってきてしまいました。ホテルに向かう車の中で、僕は寂しい気持を隠せずにはいられなかった。ホテルに着き、手紙を書きます・又お会いしましょう、と約束をした後、僕は一人一人の手を握り、ありがとう、と言ってお別れをした。

僕は、又、彼らに今度は日本で逢える事を夢見てがんばっていきたいと思います。

### ③ 日野 徹

ホスト：呂 尚濱氏 (Yeo Sang Bin)

会社代表

夫人、息子二人

私は、今回の一泊二日のホームステイにおいては、とても多くの事を学び、吸収することができたので、多大な満足感で一杯です。一泊二日というのは決して長くない期間ではありますが、私にとっては、すごく充実していましたので、一ヶ月にも相当するものだったと思っています。

私のホストファミリーの呂 尚濱一家には、私と同じ大学生と大学院の二人の息子さんがいました。まずわたしは、家に案内され、そこで、私も緊張していたこともあって、堅苦しい挨拶などを交わし、四人で（ホストは仕事から帰ってきていなかった。）夕食を食べました。料理は、私に配慮してくれたためか、「全て、日本風の味で料理しました。」とのお母さんの言葉でした。夕食の頃になると、私も、家族も気軽にいろいろと、日本の習慣・伝統のことなどについて、話しをすることが出来ました。夕食後、二人の息子さん達と一緒に、彼らが、よく行く居酒屋に連れていってもらいました。そこには、彼らの友達三名が来ていて、しかも私と皆同年代なので、何も気兼ねや、遠慮することなく、まさにざっくばらんに楽しく過ごせたので、とても充実していました。そしてそこにいる皆と一緒に、韓国でのまた日本での社会問題や、大学生活のこと等、いろいろと幅広い話題について、話し合えましたし、情報交換ができたので、ここで私は、形式上の国際交流ではなくて、友情を通しての人と人との交流、すなわち真の国際交流を体験することができたのだと実感しました。

以上のようなことで、この一日は、私にとって最も印象的でありました。翌日は、お母様と息子さん達と一緒に、彼らが行っている大学・大学院に連れていってもらいました。まず最初に、下の息子さんが通学している高麗大学に行きました。とても広いキャンパスで、校舎を一つ一つ詳しく説明してくれたので、同じ大学生である私にとって、とても興味深いことだったので、その親切を嬉しく思いました。次に、長男が行っている Sogang 大学へと案内されました。そこでは、校舎内の教室、研究室等の施設も見せていただいたのでとても良かったです。

それから昼食を、学生街・新村にてとり、最後にソウル市内で最も大きいと言われる教保文庫に行きました。本当にものすごい規模の書店だったので驚きました。以上のようなスケジュールで私は、ホームステイをしたのですが、実際に家庭の中にいる時間はさほど長くなかったので、家庭内における日本との生活スタイル・習慣の違いは多くは体験出来ませんでした。私にとって何より良かった事は、私と同年代の人々と直接に交流する時間が多く持てたことです。本当に短い期間でしたが、とても印象に残る一泊二日のホームステイでした。

④ 牧野 雄

ホスト：金 炯判氏 (Kim Hyung Pan)

会社役員

夫人，息子二人

私のホストファミリーは、息子さん二人を持つ4人家族でした。3LDKの日本というマンションにあたる家でした。私には弟の部屋を貸していただきました。ホストである父親の方は、仕事の関係で日本語が達者な方でした。息子さんは中学2年生と高校1年生でほんの少し英語が理解できるという状況でした。

私のホストのお父さんは、韓国の一般家庭の普段の土日を味わって欲しいと言う事で、いつも通りの生活に私を加えてくれました。これは私にとってたいへん嬉しいことでした。ウィークデイは、帰りも遅く忙しいため、なかなか家庭サービスとか子供達と話したり遊んだりすることが出来ないの、必ず、土曜日の午後から日曜日一日は子供達とともに何かをする事にしているようです。私がお伺いした時間はまだ子供達は戻っておらず、少しして学院（学習塾）から戻ってきて自己紹介を申しました。そして、夕食は、いわゆる韓国の家庭料理を食べさせて戴きました。食後、日本のけん玉を紹介し、みんなで挑戦しました。お客さんが二組見えたりして、いつもの土曜日と言った感じでした。その日は12時に寝ました。

日曜日の朝はたいい何処かの公園等へ家族みんなで出かけて軽くスポーツをして外で朝食をとって帰りにサウナに入って戻るパターンが多いようです。その日はみんなで西五陵に行って朝食をとり、その後卓球をする予定だったのですが、卓球場がたまたま閉まっており、残念ながら出来ずに家に戻りました。そして家で、けん玉やオセロなどを息子さん二人としたり、また二人の学校で使っている教科書を見せてもらったりして家ぞう過ごしました。午後、お兄さんの勉強をお父さんが見る場面もあって、そのお兄さんをなかしてしまいうまで厳しく指導したりするのにも遭遇しました。

とにかく短い一泊二日でしたが、その間、あたたかい金さんの韓国家庭に私も加えてもらったという感じがしました。お父さん、お母さん、二人の息子さんの普段着の生活を見せてもらって、韓国の家庭の様子を理解出来ました。本当に韓国の家庭に入れてもらったという実感がありとても有意義であり、楽しい思い出が出来ました。

⑤ 西 忠雄

ホスト：金 倫氏 (Kim Yoon)

大学生

両親，妹一人

韓国を訪問する前に、私は韓国でホームステイの経験をした方からお話を伺う機会が

ありました。私自身ホームステイでの一番の心配は如何に意志疎通を図るかという問題であった。その方の経験談では、英語を理解する家庭は少ないし、漢字の筆談も非常に難しいとの事でした。私の韓国語の語学力と言えば、片手位の限られた単語しかないのが現実でした。この点が韓国を訪問するにあたっての一番の課題というか難問であった。この様な不安を胸に抱き、1月30日に私は韓国を訪問した。幸か不幸か当初の二泊三日のホームステイが一泊二日になり、又私がお世話になる家庭は昨年来日した学生グループの青年で既に金浦空港でお会いしており、他のメンバーに比べ知っている文だけ余裕があった。しかし、ホームステイを迎える土曜日の朝から、自分自身気持ちが落ち着かないのがよく分かった。

土曜日の午後から日曜日の午後までの丸一日韓国の家庭で生活を過ごせた事は、韓国を直接に理解する上で大変有意義な時間であった。又、私がお世話になった家庭は父親が日本との合弁会社にお勤めをされており日本語を達者に話される方だったのでホームステイをする前に持っていた不安は全く無くなった。

父親とホストの息子さんそして私の三人で韓国や日本の事について言葉の問題も無いいろいろとお話が出来たことは大変幸せであった。特に現在韓国が抱えている諸問題についても率直に話ってくれた事について本当に感謝している。

この一泊二日のホームステイで、韓国についていろいろな点を再確認をした。

韓国の家庭は基本的に儒教の影響を強く受けており、家父長制である。今回、家庭で夕食・朝食を一緒に戴いたが父親・息子さんと私の三人で、母親と娘さんが同席をしなかった。多分普段の生活では家族全員が揃って食事をしていると思うが今回に限ってした事なのか理解できなかった。しかし韓国社会の経済的に飛躍し、国際化が進む中で都市部に於いては次第に生活が西歐的になりつつあると語っていた。

次に、私自身の思い込みであったのは、同じような文化圏で漢字をいくぶん理解してもらえらるという大きな誤解であった。確かに道路案内・店の看板にしても漢字はほとんど使われず、ハングル文字であった。又、若い世代になればなるほど漢字は使われず、理解出来ないと言うことであった。

短い時間ではあったが、ホームステイを通じて韓国の生活を直接垣間見る事ができ本当に勉強になった。

韓国経済の発展と共に韓国社会は大きく変化する事だと思うが、その社会が持つ伝統的文化を大切に飛躍してもらいたい。

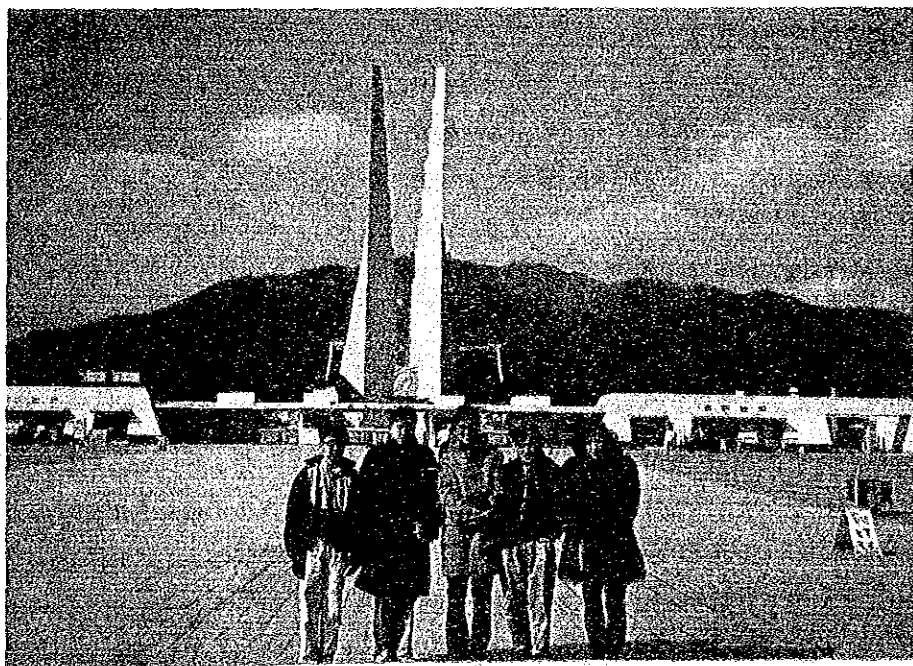
最後に、ホームステイを快く引き受けて下さった金さん一家に心から感謝申し上げます。

### 3-5 その他

#### ① 独立記念館

私達は、韓国での3日目に独立記念館を訪れました。まず車を降りて記念館の方へ向かうと、私達の目の前に天に向かって高くそびえる塔が現れました。これは、韓国の発展を意味するものであるとの事です。次に、王宮を思いださせるような立派な東洋的な建物が、ずっしりと構えています。これが記念館のメインホールです。これを囲むように七つのホールが点在しています。これらのホールは、朝鮮半島の古代からソウルオリンピックを経て現在の韓国の姿を様々な資料・写真をもって紹介しています。その中で日本の植民地下におかれていた時の事は、一つのホールをしっかりとめつけていて、そのホールの主題を「日本の侵略」としていました。私は、特にこのホールにおいては、すごく考えさせられ、衝撃的でありかつ、私自身の事実に対する認識不足を深々と感じさせられました。

日本においては、見る機会がない写真や資料、そして強い印象を与えさせるための工夫がされている拷問風景の復元等により、かつての事実を明らかに表わしていました。ここで私は、日本の教育において、日本の朝鮮への侵略については、まさに「隠された教育」であるということを感じました。私自身ははっきり言ひまして、ここで初めて知った事実が非常に多かった事を今でもはっきり覚えています。やはり事実は事実としてはっきりと認識してこそ、本当の国際関係を持つことが出来るのではないかという悟りめいた事を考えてしまいました。



そしてこの記念館は、全て国民の寄付によって建てられたとのことでした。こういう面からも彼らの歴史（事実・真実）に対する気持ちの深さを感じ取ることが出来ました。

## ② 板門店

私達は、韓国での6日目に板門店へ出かけました。まず最初に結果的な事を申し上げますと、前夜の雪の為、午前には予定していた板門店訪問は道路状況が悪く、目の前まで行きながら訪問する事が出来ませんでした。そのため私達は、滅共館、第三トンネル、統一展望台のみを見学する事になりました。

まず滅共館においては、現在までの南北関係の資料や写真の説明を受けながら見学しました。次に第三トンネルに行き、そこで軍関係者から現在の韓国と北朝鮮との関係等についての話を聞きました。そこで私は、近年かつてより南北の緊張は和らいでいると新聞等で情報を得ていたのですが、それが事実であっても、決してこの最前線においては、あくまでも依然として強い緊張感に包まれているのだと実感しました。実際第三トンネルに入ってみると、歩いているうちに所々に銃の弾跡等があり、ものものしさをひしひしと感じてきました。そして驚いたことには、今だに北朝鮮は韓国に向けて数本のトンネルを掘っている事だ。それは推定で約20本程度と言われている。現在のところ発見出来たトンネルは僅か4本にすぎない。本当に進行形なのです。

最後に、統一展望台に行き、展望台から38度線を越えた北朝鮮を見る事が出来ました。北朝鮮側には、世界に類を見ないという大きさの金日成の像（共産主義のシンボル）や共産主義特有の色使いの看板で、韓国側にアピールをしていました。そこで目に止まった物がありました。それはハングルで書かれた「願いは統一」と言う言葉です。やはり、両国は互いに統一を願っているのだと思います。しかし、主義・思想の点で大きく違いがあるのが現実で、この「願いは統一」と言う言葉は、素直に直接的に解釈すれば、とても素晴らしいものですが、一歩踏み込んで考えると、とても恐ろしい意味も有しているのではないかと私は思います。この一日の体験は、ありきたりの言葉ではあるが、「平和の尊さ・重要性」を私自身の肌で感じ取る事が出来たと言う大変有意義な訪問であった。

## ③ オリンピック公園

私達は、韓国での8日目に1988年に開催されたソウルオリンピックの舞台になったオリンピック公園を訪れました。最初にオリンピックセンターに行き関係者の方と挨拶を交わし、そこから、公園一帯を眺めました。私達の目に映ったものは、広大な敷地の中に、どっしりと構えるモダンな施設。それらのずっと向こうにある選手村の多数の建物でした。この辺一帯で、超近代都市を形成しているようでした。まさにここでは、韓国の現代を見た気がしました。それから私達は、関係者に案内されながら、第一体育館・

水泳プール・オリンピックユース・ホテルを見学しました。オリンピック公園の庭には、ソウルオリンピックにちなんで世界各国の芸術家達が創作した様々なモニュメントが展示してありました。その一つ一つには、深い意味合いが含まれていてとても興味深いものでした。この様なモニュメントは公園内に 191 作品もあるそうです。

第一体育館・水泳プールの施設は、全て屈指の技術をもっていて、世界の最先端をいくようなものでした。水泳プールにおいては、その屋根は少しでも多くの太陽光線を室内に集めることが出来るように工夫されていて、晴天の時などは、まるで外にでもいるような明るさになるそうです。

ユース・ホテルは、その 3 階にある 1988 年ソウルオリンピックに関する写真・記録等が展示されている部屋を見学しました。室内は、ソウルオリンピックのテーマ曲が流れていて、劇的なそして感動的な写真等が多数展示されていて、そこでは、今なお 1988 年のソウルオリンピックは、過去のものではなく現在もなお続いているようでした。

#### 4. 調査チーム参加者の感想

##### ② 白井 千里

はるかな昔から、韓半島を通じて、日本は、アジアの古代文明を学び歴史をはぐくんできた。

古来、韓半島の事を人々は、様々な比喩で語ってきた。

大陸を飾るイヤリング

翡翠と黄金の垂飾り

滋養あふれる乳首

全世界を照らす東方のランプ

近くて遠い国と、両国が思い続けて来たこの近代。私にとってもう 5 回目の訪問となる国なのに、初めてゆっくりと滞在をし、いろいろな角度からこの国を見る事が出来た。韓国青年招へい事業の韓国学生代表団を当初三年連続プログラムコーディネーターとして担当し、第一回目は、地方プログラムも、私の出身地・岐阜県で引き受けた経験も加わり、印象深い代表団であった。そして、年を増す度に、韓国青年と日本青年の理解・関心として理解に相違点がある事を発見し、それ故に、この招へい事業の意義を見出していくのであった。

今回、韓国政府・教育部・在大韓民国日本大使館・国際協力事業団・世界青少年交流協会のお世話になり、第一回韓国アフターケア調査団のチーム・リーダーとして十日間韓国に訪問出来、大変意義深いプログラムを準備して戴き、大変なおもてなしを戴き少しでも多くの韓国をそしてその人々を知る事が出来、帰国でき大変嬉しく思います。

表敬・訪問各地での視察・産業視察・文化伝統芸術・学校教育等、訪日青年との再会、そして今回のプログラムのハイライトは、やはりホームステイであったと思います。15年前、ホームビジットをした事はありませんでしたが、今回の様にホームステイをこの国で行ったのは、私にとって初めてで、又民泊家庭にとっても初めての外国人の客でした。言葉の壁があまりなかったせいもあり、皆でいろいろな話をしました。特に大学生の二人の娘さんには、私を通して日本・日本人を理解してもらおう事が出来た様で、嬉しく思いました。

その国の事を理解するには、その国の人と友達になる事だと言い続けていた私ですが、やはり今回は、ひとしお嬉しさがありません。この若い二人にも是非いつの日か近い将来このプログラムで日本に来て欲しいもどと祈らずにはられません。

板門店を目の前にして入る事が出来なかった事は残念ですが、第三トンネルの視察や南北分断の悲しい現実を統一展望台から望む時、この2キロメートルの非武装地帯をはさんで同じ民族が全く違う体制の下で生活し、軍事的なにらみあいが続いているあの緊張感、東欧を訪れた事のある私にとっても、違うものがありました。

平和な中で生活する私達にとって、21世紀は、アジアの時代と言われる様、その道がどこまでも平和に向かつて進んで欲しいと願ってやみません。

再会したあの優しい青年達の笑顔と日本の青年の笑顔がこれからも続いていく様より良いプログラム作りと、相互理解の友情計画プログラムに取り組むつもりです。

美しい古都、慶州ももう少し長い滞在であったらとか、民泊もあと一日長くとか名残尽きないアフターケア調査団の旅も無事に終わりました。関係各位にあらためて御礼申し上げます。

## ② 田中 克典

1月30日から始まった10日間の韓国旅行は、僕にとって初めての海外旅行という事もあって、一日一日がとても新鮮でした。韓国の関係者とお合いましたり、一泊だけだったけれどホームステイをしたり、名所旧跡や学校を見学したりして、毎日がとても忙しい日々でしたが、一日も「えらい」と思った事はありませんでした。ただ食事の面で、日本食が恋しくなった事もありましたが……。

でもとにかく国境を越え、他の国の人々とふれあい、話合い、通じあう事により人というのは、どの国でも同じ匂い、同じ血がかよっていて、同じ人間だということがよく分かりました。韓国の青少年達や大人の人達も、この思いは同じだと思います。たとえ言葉や皮膚の色が違って、目や髪の毛の色が違って、同じ人間同士、心が通じあえば他人であろうと、親兄弟みたいなものです。

僕は、韓国アフターケア調査団の一員として、韓国を訪問した訳ですが、10日間とい



う短い期間の中で、韓国の全てを知るには、あまりにも短い時間でしたが韓国の習慣や生活、その他もろもろの事は理解出来たつもりです。でも、やはり10日間というのはあっという間に過ぎさってしまい、本当に心おしい気持ちで日本へ帰ってきてしまいました。出来る事なら、また、ぜひ、韓国へもう一度訪問したいと思います。

すてきな思い出をいっぱい、有難うございました。

#### 韓国青年とのふれあい

韓国人というのは、ともに日本人と似ています。姿・形と髪や目の色などまったく同じでどこから見ても、日本人そっくりです。韓国の人達も同じように感じていたと思います。初めて逢った韓国の青年たちとも何気なく会話が出来たのは、やはり、そういった事からだと思います。

韓国では、目上の人に対する礼儀というのはとても大切で何をするにしてもその人の許可がいるくらいです。タバコにしても、お酒にしても、それぞれマナーがあります。日本人の僕にはそんな事は全く知らず。普段の日本の生活と同じ振る舞いをしてしまいました。僕と知りあった韓国の青年達や大人の人達は多分、機嫌を悪くしたと思います。でも青年達はそんな事は気にせず、僕たちに優しく接してくれました。韓国の青年達との交流会の時、お互いがさまざまな外国語（日本語・英語・韓国語）を使い、自分の意思を相手に伝える姿などは、日本人や韓国人という事をとおりこして、人として心が通じあっていたように思えます。

お酒の力というものは凄いもので、お互いの警戒心を取り除いてくれるだけでなく、いい気分にもしてくれます。韓国の青年達は、とてもお酒好きで次々と飲みほしてしまいます。僕達日本人も負けずと頑張りましたがやはり韓国の青年達にはかないませんでした。今度、一緒に飲む時は日本の飲み屋で飲み明かしたいと思います。

とにかく韓国の青年達はとてもいい人達ばかりで、ふれあううちにだんだんと好きになってしまい、さよならを言うのがとても辛かったです。でも、とても楽しい思い出ばかりをプレゼントしてくれて心から「ありがとう」を言いたいです。

#### ③ 日野 徹

今回韓国アフリーケア調査団として韓国へ行くという話は私の所にきたのが、まさに出発の8日前と言う事で、とても急であったため初めは、全くと言ってもいい程、内容を把握していなかったのが、不安で一杯でした。しかし、結果的に申しますと、今回の韓国の訪問で、私自身とても新鮮で多大な感動そして体験で出来た事を心から感謝し、喜んでいます。先にも申しましたが、話が急で、しかも私自身大学の後期試験の最中でもあったので、事前に心の準備が出来なくて、本当に不安でしたので、その感動はひとしおです。

私自身大学において国際交流会というサークルに属していますので、とても海外の事（特に私はアジア世界）に興味がありましたので今回は絶好のチャンスでした。今回の韓国訪問において私が最も印象に残っていてかつ楽しかった事は、ホームステイと、昨年日本に来た大学生達との意見交換会、交流会です。つまり、言い替えますと、私と同じ年代の学生達と直接交流ができたということです。

まずホームステイでは、私のホストファミリーには、大学生と大学院生の二人の息子がいて、夕食後、彼らと一緒に居酒屋に行き、そこで彼らの友達三人と合流して、お酒を飲みながら、何の気兼ねもなしにざっくばらんに、シリアスな問題（日本と韓国の関係について等）から、大学での生活までと言うような広範囲でかつ様々な事について話し合えましたし、彼らがとても好意的でしたので、友達になる事も出来ました。

次に昨年日本に来た学生達との意見交換会、交流会においては、今回が私にとって、彼らに会うのは、まさに初めてであったのですが、彼らは、とても親切で、しかも気軽にいろいろと話してくれましたので、初めて会ったとは、決して思えない程でした。やはり彼らともいろいろ話す時間が取れましたし、もちろん友達になることが出来た事を本当に嬉しく思っています。

私は、友情は人生の宝だと信じていますので、今回の韓国の訪問で多数の人と友達になれた事だけでも大満足です。しかし今回はその上、教育部や在韓国日本大使館等実際にに行く事が出来、そこで、しっかりしたポストについている方々から直接に話しを聞くことが出来ましたし、さらに名所旧跡まで見学出来たということで、本当にこのような機会に出会えた事に感謝しています。

しかし一つ残念なことは、私の韓国に対する認識不足です。ですから今度は是非、認識を深めて韓国を訪問したいと思っております。今回の韓国訪問は、私の中での韓国は近くで遠い国という考え方からの脱出の第一歩であると信じています。私と一緒にいった方々、そしてご配慮を戴いた方々本当に有難うございました。

#### ④ 牧野 雄

やはり、その国に実際に足を運んで自分の身体で見、聞き、味わうほどその国を理解するのに早い道はないと思います。1988年度、初年度当会で日韓の学生合宿セミナーを担当することになったとき、さすがにこれは他の国とは違って日本が今抱えている日韓問題をよく理解して、彼らの日本に対する気持ちを理解して臨まないで交流どころではなくなってしまうぞ、という緊張感が当会の中で漂いました。そして、韓国留学生を招いたり、大学の専門の教授を招いて講演して戴いたり、関係のビデオでの勉強会を開いたり、様々な関係の本を読んだりして、何かと最初の彼らとの合宿セミナーで心と心の交流が出来るよう努力したものです。一般的に日本人の日韓関係の認識はまだまだ低

いものです。彼らを事前に理解するために前記のような勉強会を重ねれば重ねるほど我々日本側の学生はどうしても不安が大きくなっていった覚えがあります。やはり日韓の歴史と、韓国の方々の日本に対する感情というプレッシャーが理解すれば理解するだけ大きくなっていったのです。……初年度、実は彼ら韓国の学生も逆に意識して緊張した面があったそうです。でもそれは4日間で、氷が溶けるようにほぐれていき、お互いが相手の気持ちを意識して臨んだ分、交流が深まったように思えます。

そして3年間で3つのセミナーが行われたわけです。しかし、毎年スタッフを除き参加者はかわりますので、その緊張感は繰り返されているわけです。初年度実行委員長をさせていただき、また3年間セミナーを見てきて、訪問してきた韓国の学生を通して自分なりに韓国という国を理解してきたのですが、どうしてもいま一つ分からない・見えない部分というものがありませんでした。私にとって今回の訪問はそのギャップが埋められた気がして、本当に意味深いものでした。やはり、肌で感じるのは言葉では理解出来ないものを感じとらせてくれます。この10日間は、生の韓国を知る上で非常に有意義なプログラムが組まれていたと思います。またこの「韓国青年招へい事業」を発展させるのに両国にとって重要な役割を果たしていると思います。各関係団体との討議の内容に出たこのプログラムの改善すべき点は、早速検討して1991年度に生かしたいと思います。自分がこの日韓関係で出来ることは、民間レベルで、人與人レベルで誤解を解いて、本当の純粋な気持ちでつきあっていくことが出来るようにしていくことだと再認識しました。このプログラムを韓国側で心を込めてコーディネートして戴いた権先生をはじめとする教育部の関係の方々に感謝致します。

#### ⑤ 西 忠雄

今回韓国を訪問する機会を得たことは、「韓国青年招へい事業」に携わる者にとってまたとない事であった。又、個人として「韓国」についていろいろな書物で勉強をしたが、未だ訪問したことのない国ただだけに、この機会に自分なりにあらゆる角度から勉強をしようと考え訪問した。この10日間を韓国で過ごし、日本では感じる事の出来なかつた事について二三述べてみたい。

まず一番強く感じたのは、過去の歴史認識の「差」であった。

今回、独立記念館を訪問し、そこで見学したものは韓国の古代から現在の韓国の様子まで至る歴史であった。しかしその半分以上が秀吉の韓国出兵と明治以降の日本の対韓侵略に費やされていた様に思える。特に日韓併合からの36年の歴史については、我々日本人がまず学校の歴史では触れる事の無い歴史である。この辺を日本人側として、正しく認識することが今後の両国の交流を含めていく上で、大切なのではないか。「進出」か「侵略」かと言う言葉の問題ではなく、歴史の上に立った認識をし、考える必要があ

るのではないか。

次に、東欧社会は西欧社会の緊張緩和が進むとはいいいながら、一番最後になると考えられる 38 度線を訪問したとき、何とも言えなかった。よく日本人は「平和ボケ」していると言われるがこの時本当にこの言葉の意味が実感として理解できた。同じ民族が軍事的に対峙し合う局面を見ると共に、ソウル市内でも自動小銃を持った軍人が要所に配置されていた現実。ホテルの部屋のテーブルの上は防空訓練の案内のお知らせがおいてあった。又、徴兵制についてホームステイで少し話したが、大学生が勉強の途中で兵隊に行くことは、勉強上の大きなマイナスと同時に大きな負担であると語っていた。

10 日間いろいろな処を訪問する機会に恵まれたが、本で得る事の出来ない知識・体験を得た。それは、韓国は韓国独自の社会・文化を誇りにしており、又日本人も自国の文化に誇りを持って今日まで来た。お互いに文化を尊重し合う事が大切なのではないか。私にとって近くて遠い国だった「韓国」は、今回の訪問によつて本当に近い存在になった。最後に、いろいろお世話を戴きました関係各位に心より感謝申し上げます。

## 5. 提 言

第一回韓国アフターケア調査団として、韓国を訪問し、そこで得たことを基に次のような提言をしたいと思います。

今回の訪問に際し、他の ASEAN 諸国の現状と違い韓国には未だ完備された同窓会組織がない。

従つて今回の訪問については、韓国側でこの「韓国青年招へい事業」を取りまとめている教育部に多大な協力とお世話のもとに成功を収めたものと確信する。

「韓国青年招へい事業」の参加者を一過性の者として見過ごさずに、良い意味での組織づくりが急激な課題と思われる。

このことは、「韓国青年招へい事業」を更に発展させる事を視野に入れるなら、韓国側との正式な話し合いのテーブルに入れる必要があると考える。

日本側・韓国側双方にとって、「韓国青年招へい事業」の青年にもたらず相互理解促進については疑問が無いと思う。そしてこの事業の意味を考えれば、5 年間だけに限定することなく更なる延長が必要とされ、このことによつて日韓交流の新しい地平が拓かれるものと確信する。

# フィリピン

平成3年2月19日～2月28日

日本青年団協議会



## 1. 調査チーム派遣概要

### 1-1 調査チームの構成

- ① 大石 節雄 (男) 日本青年団協議会  
日本青年団協議会にて国際活動担当役員として、「21世紀のための友情計画」の企画運営に取り組んでいる。
- ② 保角 里志 (男) 山形県企画調整課・国際交流班  
山形県で開催される国際活動の担当者として、「21世紀のための友情計画」の地方公共団体の窓口担当者として取り組んでいる。
- ③ 熊木 邦夫 (男) 国立オリンピック記念青少年総合センター  
「21世紀のための友情計画」合宿セミナーの青年リーダーとして、積極的に参加活動している。また、日常的にも青少年の育成にも取り組んでいる。
- ④ 三好 貢義 (男) 愛媛県青年団連合会  
地方協力団体として、「21世紀のための友情計画」招へい青年を受入れ、企画運営に取り組んでいる。
- ⑤ 福田 淳 (男) 日本青年団協議会  
実施協力団体の実務担当者・プログラムコーディネーターとして、企画運営に取り組んでいる。

### 1-2 調査日程

- ① 調査日時：平成3年2月19日(火)～2月28日(木)

#### 2月19日(火)

10:15 PR431 便にてマニラへ

13:50 マニラ到着→ホテルに移動

16:00 JICA フィリピン事務所表敬訪問

※フィリピンでの JICA 技術協力、無償資金協力実施計画についての実施状況、JICA の役割等の説明を受けた。

18:30 JICA、PAJAFPA のメンバーとのブリーフィング

#### 2月20日(水)

10:00 JICA 事務所でのブリーフィング

14:00 フィリピン外務省表敬訪問

※「21世紀のための友情計画」に対する外務省の役割等の説明を受けた。

18:00 自主研修

2月21日(木)

9:00 National Manpower & Youth Council (NMYC) 訪問

12:00 San Miguel Corporation 訪問

※企業が地域に還元するために、青年に地域活動を奨励しており、社会福祉、青少年活動についての説明を受けた。

15:00 Philippine Long Distance Telephone Company 訪問

2月22日(金)

9:30 青年海外協力隊活動現場視察

リバ農業試験場視察(面会:中里隊員)

12:30 アラバン国立家畜人工授精センター視察

(面会:三島,長岡,内島隊員)

17:30 セブへ出発

19:00 セブ到着後、ホームステイ対面式

ホームステイプログラム

2月23日(土) ホームステイプログラム

2月24日(日)

12:00 ホームステイよりセブ空港に集合

13:10 マニラへ出発→到着後、自主研修

2月25日(月)

10:00 Villa Escudero 見学

2月26日(火)

8:00 パテロス(メトロマニラ)区庁訪問

※パテロス区長と共に、パテロス地域の学校、病院、診療所、地場産業、スラム等を視察見学する。

13:30 アヤラミュージアム見学

16:45 市内見学

19:00 PAJAJAのメンバーとの懇談会

2月27日(水)

9:00 サントトマス大学訪問

11:00 アプア インスティテュート オブ テクノロジー高校訪問

14:00 サンチャゴ要塞跡, リサール記念館等見学

15:30 サン・アグスチン教会見学



19 : 00 フェアウェルパーティー

2月28日(木)

14 : 20 PR432 便にて日本に帰国

### 1-3 主要面接者

(1) JICA フィリピン事務所

面接者 副所長 竹内 喜久男

(2) フィリピン外務省表敬訪問

面接者 Ms. SONIA CATANBER BRANDY

Director - General, Asian & Pacific Affairs

(3) Republic of the philippines, National Manpower & Youth Council

面接者 Mr. NELSON R. GARMA

Director

(4) Republic of the philippines, Pateros, Metro Manila

面接者 Mr. JOSE "PEPE" T. CAPCO,

JR Mayor

(5) フィリピン同窓会 (PAJAJA)

Mrs. ELIZABETH FRORES - GARUCIA (Chairman of PAJAJA)

Mr. FRANCISCO M. GARUCIA, JR

Mr. VICENTE FIDEL G. GUIDOTE

Mr. CATHY S. SALDANA

Mr. VINCI NICHOLAS R. VILLASENOR

Mr. JESUS FELICIANO C. REYES

## 2. 調査の要約

今回の調査目的は、「21世紀のための友情計画」に参加した招へい青年との再交流、意見交換、帰国青年の職場訪問などを行い、招へい青年が日本に来日し、どのような成果があったのかを再確認した。さらに、今後どのように招へい事業の改善すべき点を意見交流会を通じて協議を行った。

## 3. 現地活動報告

### 3-1 表敬、訪問先における意見交歓内容

(1) JICA フィリピン事務所

資料をもとに、フィリピンの概要と JICA の役割・協力活動について説明をうけた。

現在、JICAのフィリピンでの活動では、地方に支援をしたいが政治的な問題が多く困難な状況でもある。また、昨年の台風や地震等の災害が続きフィリピン全体のダメージが大きく支援体制を強化しなければならない。

「21世紀のための友情計画」青年招へい事業については、交流の積み上げを行う必要がある、フィリピン外務省と今後も協力体制を強化していく。

## (2) フィリピン外務省

フィリピン外務省では、JICAの「21世紀のための友情計画」招へい事業を大変重視している。第1フェーズから第2フェーズに入り、これまで以上にフィリピン青年の日本に対しての関心が高まっている。

現在、フィリピン国内の12地区で青年を募集し、メトロ地区のカウンセラー（地方開発委員会）を組織して人選をしている。しかし、フィリピン南部より人選され青年がメトロマニラに来ると、カルチャーショックを受けてしまうのが1つの問題である。そのような問題を考慮しメトロマニラでの事前現地プログラムの充実した日程づくりに努力している。

招へい事業にはフィリピン全地域の青年に参画してほしいと思う。

## 3-2 帰国青年同窓会の活動状況

フィリピン同窓会 PAJafa は「21世紀のための友情計画」による招へい事業に参画した青年たちで組織され選挙で役員選出を行い、本部のあるメトロマニラにて月1回の定例会と事業に向けての委員会を開催し、組織運営のための財源確保を行っている。

主な事業としては今年ブルネイにて相互理解を深めるために「人生」をテーマにした写真展を企画し、さらにブルネイでの展覧会ほか各ASEAN地域でも開催を予定している。また、「21世紀のための友情計画」に参画した青年を取材しニューズレター等も発行し各国に送付、出版活動にも積極的に務めている。

しかし、フィリピン全土への連絡が体制がとれておらずメトロマニラだけで活動している傾向がある。

## 3-3 PAJafa との招へい事業についての意見交換（要望）

### (1) 共通プログラムについて

① 共通プログラムはかなり改善されているが、もう少し日本青年との交流を望む。

### (2) 都内プログラム・合宿セミナー

① 都内プログラムでは講義的なプログラムが多く、日本青年との交流を望む。

② 合宿セミナーでの2泊3日では期間が短く十分な交流ができない。

### (3) 地方プログラム

① ホストファミリーの名簿（家族構成）をもう少し事前に知りたい。

② ホームステイでは特別扱いをしないで、日常の生活に触れてみたい。

③ 日本人の生活習慣をもう少しレクチャーしてほしい。

### 3-4 ホームステイ実施状況

ホームステイ実施：セブ

実施日程：2月22日～24日（2泊3日）

受け入れ家庭

Mr. BONTUYAN EDGAR (1989年 教員グループ) 大石 節雄

Mr. RICAMORA HENRY (1988年 青年指導者グループ) 保角 里志・福田 淳

Mr. SUCALIT RAMON (1989年 教員グループ) 熊木 邦夫

Mr. HERMOSISIMA VALERIE (1989年教員グループ) 三好 貢義

ホームステイは1989年に教員グループで来日した青年が、中心となり受け入れを行い、各ホストファミリーで日本での感想を語り合い、帰国青年の職場訪問などの充実した心温まる日程であった。また、この2泊3日のホームステイを行ったことでフィリピンでの日常的な生活に触れることができ相互の理解を深めることができた。

## 4. 訪問国における青少年団体の活動状況



① National Manpower & Youth Council (NMYC)

NMYCでの主な活動は、フィリピン青年の技術向上のために政府の援助で工業からサービスの分野まで研修させる。昼、夜のコースがあり自動車のメンテナンス・建設・電気工学・洋裁・コンピューターSE・ホテルやレストランのサービスコミュニケーション等があり熱心に研修に取り組んでいる。

フィリピンでは失業率が高く1つの社会問題でもあり、政府もNMYCの技術研修推進事業には高い評価をしている。

ここでの青年は日本に対して関心が強く、日本の工業技術を学びたいとの意見が多かった。

5. 青年招へい事業に対する相手国側の評価（関係機関・帰国青年等）

全体的な集約をしてみると、招へい事業に対する評価は高い。また、フィリピンの青年は日本に対し関心が高く、青年一人ひとりの向学心が強く感じられた。「21世紀のための友情計画」による招へい事業では1つのグループ一ヵ月の日程の中で研修と交流を整理し、なおかつ変化をつけたプログラムを組む必要がある。

## 6. 調査チーム参加者の感想

### (1) 日本青年団協議会常任理事 大石 節雄

今回、アフターケアチームの一員として各自それぞれの立場で参加した4名の調査団員と共にフィリピンを訪問した。日本に招へいされた帰国青年と再交流できる喜びと、彼らが現在どのような活躍をしているのか期待を抱きながら出発した。また、招へい事業内容の聞き取り調査も今後の事業の発展充実のために重要な点として行ってきた。以下、項目別に報告したいと思う。

### 1. 帰国青年が来日した感想

やはり日本は豊かな国、清潔な国、規則正しい国、工業化が進んでいる国というような印象が持たれているようである。そして、フィリピンの青年たちの日本に対する深い興味と大きな期待を持っている事が感じられた。

### 2. 帰国青年からの招へい事業に対する要望

「21世紀のための友情計画」青年招へい事業の一カ月の滞在日程では全体的には満足しているようであるが、日本の文化であるとか一般的な生活環境、労働条件をもっと深く知りたがっているようであった。特に一部の地域の青年ではなく、全国的に幅の広い地域の青年たちとの交流をもちたいようである。このことについては、私たちアフターケアチームもフィリピンを訪れて思ったことであるが、フィリピンのいろいろな地域の青年たちと交流を持ちたいと感じた。

また、フィリピンの青年から日本人に対して、もっと地方において国際的感覚を高めてほしいとの意見も出され、私の感じたことは、現在、情報面では日本はいち早く国際情報を察知することができて、やはり国際的な体験があまりないために国際感覚のズレが生じている。私たちを含めて、このような国際交流を通して日本の青年が国際感覚を高める機会を増やしていく必要があると痛感した。

### 3. 帰国青年の活動状況

帰国青年でPAJAFという同窓会を組織し、毎月1回の定例会を行い活動を展開している。具体的な活動としては、組織自立のための資金集めをメンバーで検討し活動を行ったり、専門的な技術発展のためのセミナー開催の検討や、さらに貧しい人々に対する支援を考えているとの事であった。

しかしながら、PAJAFの活動する青年がメトロマニラに限られていて、フィリピン全域からの帰国青年組織には現在なりえていない困難な状況である。

その他の ASEAN 諸国も帰国青年の同窓会を組織しており昨年は、シンガポールにて「青年のつどい」を開催するなど交流活動や、日本と ASEAN 諸国友好親善の本の制作なども行っている。

私が強く感じた事は、帰国青年が来日した事を機会に青年活動に取り組み、また、その姿に感動を受けた。やはり、厳しい選考基準をパスしてきた青年たちであるので、必ず自国の発展のために日本との益々の友好関係発展のために、頑張ってくれるものと確信する。

しかし、1つだけ欲を言わせてもらえば、フィリピン全域の帰国青年組織の確立と彼らを中心とした青年組織づくりを望みたいと思う。若い世代の多いフィリピンにおいて、国家発展のため、国際理解のために青年が組織されたら素晴らしい事だと思うので、そのためにも「21 世紀のための友情計画」による日本の招へい事業のプログラムの中に、青年組織論の講義や現場の視察・見学を今以上にもっと組み込んでいく必要があると考える。日本国内でも厳しい課題であるが共に考え発展させていく事が必要であると思う。

#### 4. 招へい事業の今後の課題

国際交流の原則として、国際的な相互理解は必要不可欠な事であり、受け入れる側も受け入れられる側も事前の学習はもちろんのこと、1 回だけの交流ではなく継続される（定期的な）交流が必要だと思う。そのためにもプログラムの一層の研究・発展を期待する事と、日本の青年も直接諸外国を訪問し、現地の青年と交流する事も考えなくてはならないと思う。

相互理解というものは数・量とも、等しい状態で行われてこそ発展するものであるので、一方通行（片側交流）にならないように考えていかななくてはならない。

#### 5. 今後の在り方

今まで述べた中にも触れているが、諸外国の青年たちの日本に対しての期待と関心は高く、これからももっと多くの青年を招へいすることは大きな意義のあることと思う。そして、可能な限り日本の青年もただの観光に留まらず目的をもった諸外国訪問を増やしていく必要があると考える。

さらに、定期的な交流拡大のために青年組織間での交流を促進していかせる事と、21 世紀に向かい青年同士の固い友情を永続することが必要であるとフィリピンを訪問してそう確信した。

以上のことを、アフターケアチームに参加し実際に肌で感じ取りこのような体験を生かして、これからの「21 世紀のための友情計画」青年招へい事業に取り組みたいと思う。

最後になりますが、このような素晴らしい交流の機会を与えて下さった国際協力事業団

の方々及び大変お世話になったフィリピン PAJAFPA のガルシア委員長並びにメンバーの方々に対し感謝を申し上げたいと思います。

## (2) 山形県企画調整部企画調整課 外事主査 保角里志

### 1. はじめに

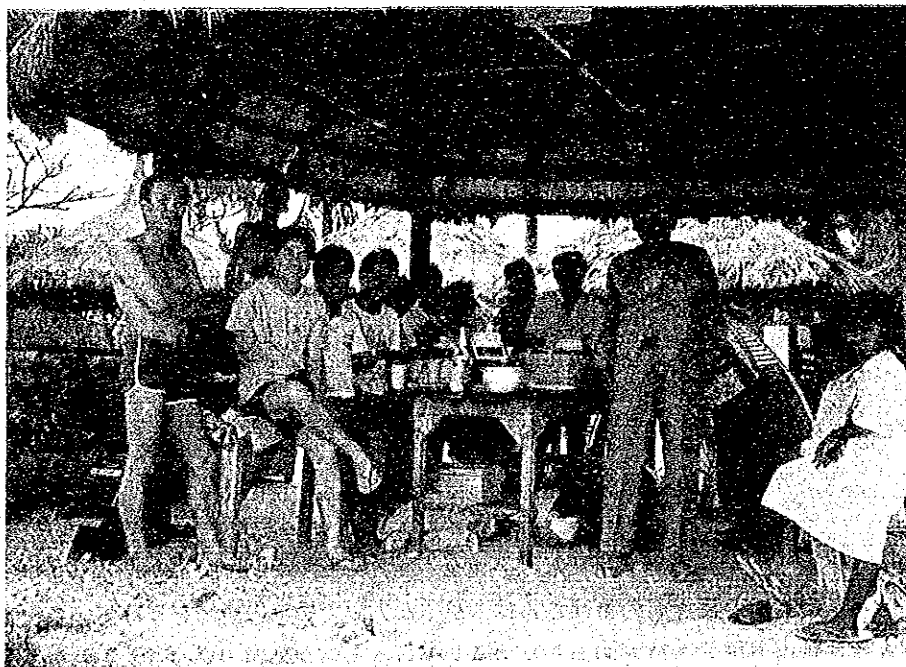
国際協力事業団の「21世紀のための友情計画」(青年招へい事業)のアフターケア調査のために、フィリピンに10日間出張したが、私にとっては初めての外国旅行ということもあって大変印象深かった。

フィリピンに行く前に、私のもっていたフィリピンのイメージ(それは、たぶん大多数の日本人のフィリピンへのイメージと思うが)とフィリピンでみた実際は、あまりにもかけ離れたものであった。「百聞は一見に如かず」という言葉の意味を、身をもって体験した10日間であったと思う。

次に、これらの私のフィリピンでの体験と感想を記したい。

### 2. フィリピン青年との交流

私達がフィリピン滞在中のほとんどのプログラムのお世話をしてくださったのは、21世紀のための友情計画で日本に来た青年達で組織する同窓会であった。



セブ島のホームステイ先も同窓会の会員の家であった。

同窓会長のガルシアさんをはじめとする同窓会の方々、そして国立職業訓練センターでは若い研修生、さらには農業省農事試験場では日本に研修予定の農業青年の方々と話し合いの機会をもつことができた。

特に、私の印象に残っているのは、純真ともいえるべきかれら青年達の目の輝きであり、明るさであった。また、話し合いのなかで感じられるのは日本への期待であった。私が、国立職業訓練センターで「皆さんは日本に行きたいと思いませんか」と質問したとき、全員が声をそろえて「日本に行きたい」と答えていたのが印象に残った。

また、今回の調査対象の「21世紀のための友情計画」は、フィリピン青年達の日本理解に大変役立っていることが実感された。友情計画のプログラムは、全体的には大変好評であった。しかし、それにしても考えてみると当然なのだが、フィリピン外務省がかれら青年を「21世紀のための友情計画」で日本に派遣するのは、日本青年との交流が主眼ではなく日本の技術を学ばせフィリピンの国づくりに役立てるためということも理解された。さらには、かれらが同窓会をつくり活動しているのも、サークル活動ではなく国づくりのためであった。

セブ島でのホームステイは、大変貴重な生活体験となった。ホストファミリーの対応は、全然かまわないようで一生懸命私達をもてなしてくれているのが、ちょっとした対応によく現れていた。このホームステイを経験して、これからの日本での受入れの場合の生きた勉強となった。

### 3. フィリピンの印象

マニラ、セブ島だけのフィリピンであったが、同窓会のお世話でいろいろな所を訪問することができた。特に、フィリピンの下町ともいえるべきパテロス区を区長さんの案内で、スリッパ工場から学校、保育園、診療所などを歩いて半日回り、フィリピンの実情理解に大変参考になった。

以下、私のみたフィリピンの印象を述べてみたい。

#### ① フィリピンと日本とのかかわり

マニラの町には、日本製の車が数多く走り、味の素、キャノン、カシオ、ミツビシ、ヤクルト、NECなどの日本企業の大きな看板が目につく。日本料理店も多い。

パテロス区の雑貨店のおばさんは、息子が大阪で松下の研修をうけているといい、また百貨店では、店員と間違え私に話しかけた若い女性が、私が日本人と知ると友達が神奈川にいると教えてくれた。また、どこにいても片言の日本語を話す人の多いこと。



パテロス区長は、対日感情について「戦争直後は、フィリピン人100人のうち100人とも反日感情をもっていた。しかし、現在は戦前の人を除き100人中90人までが日本に良い印象をもっている。」と話してくれた。

このように、日本の海外への密接なかかわりを身をもって実感できたのは、大きな収穫であった。

## ② 若い人の多さと女性の活躍

マニラは、どこにいても若い人が目についた。郊外では子供がたくさん路上で遊んでいた。

年少人口の比率は、4割程度という。とにかく若い人の多い国と感じた。

また、目についたのは、女性の社会進出であった。

外務省の担当課長は女性、国立職業訓練センターの責任者は女性、更には訪問した大学で教鞭をとっていたのも女性が目についた。訪問先機関の責任者は、たいてい女性であり、日本との違いを実感せざるを得なかった。



### ③ 病めるフィリピン

町には物があふれ、人々は親切で明るく料理は豊富で、果物はおいしい。また、自然は美しく、色さまざまな花が咲き乱れていた。

しかし、病めるフィリピンの姿も多くの場所で見ることができた。

スラム街の一間の掘立て住居群、教会のこじき、職がなくぶらぶらしている若い青年達、下水と化した河川、車の異常な排気ガスのためにマスクをする若い女性など。

フィリピンの停滞の理由を考えると、長い間スペイン植民地であったという歴史的要因、また大地主制度など社会的システム要因など多くの理由があると思う。

しかし、同窓会で案内いただいたアヤラ博物館でのいろいろな資料をみるとフィリピン人は非常に手先は器用で、スペイン進出以前は独自の文化を発達させており、これからの発展の素地はもっていると感じられた。

### 4. おわりに

フィリピンに行く前は、フィリピンというと、クーデターの頻発する世情不安の国、ジャバゆきさんのくる国、貧富の差の激しい国という、私も漠然とながら悪いイメージをもっていたことは否定できない。

しかし、実際フィリピンに行き、フィリピンの町を歩き、人々と接触すると決してそれだけではないと実感することができた。マニラの百貨店で夕方ぶらついたときは、夕暮れのなかでフィリピンの人の肌の黒さが消え、私は日本の中にいるような錯覚さえ覚えた。フィリピン人と間違えられて、2回話しかけられた。そのとき、私は人種的にもフィリピンは近いと感じた。

6月からは、山形県にもフィリピンからの研修生を受入れる予定であり、今後ますます隣国フィリピンとの交流は盛んになるに違いない。今回の出張は、国際交流だけでなく今後のいろいろな事に役立つ体験であった。

年度末を控え多忙な時期にもかかわらず、このような貴重な機会を与えてくださった山形県企画調整部の皆さんに厚く感謝申しあげたい。また、同行した大石団長さんをはじめ皆さんには大変お世話になった。本当にありがとうございました。

### (3) 熊本 邦夫 (国立オリンピック記念青少年総合センター)

湾岸戦争の最中、不安と期待を抱いて日本を出発した我々、フィリピンアフターケアチームの面々は、マニラ及びセブ島での有意義な10日間を過ごし、無事帰国できたことを喜ばしく思っているとともに、一抹の寂しさを感じている。

寂しさの原因は、やはり心温かく明るいフィリピンの友人たち、あるいは、ホームステイでできた新しい家族たちとの別れがあったからだと思う。

さてまず最初に、今回のアフターケアチームの目的である既参加青年の活動状況と、今後この「21世紀のための友情計画」に期待することなどを簡単に報告させていただき、後半は私の体験と感想を述べさせていただきます。

御存知のようにフィリピンは、数多くの島々から成り立っている国家であり、これらの島々をメトロマニラを除いて13のプロビンス（日本で言う県であろうか）に分け統治している。したがって、全ての既参加青年たちが相互に連絡を取り合うことは、かなり困難であると言える。

しかしながら、彼らは、発足してまだ間もない「PAJAJFA」と言う同窓会組織を結成し、本部をメトロマニラに置き、それぞれのプロビンスに支部を置き、相互の連絡を取り合っている。

各プロビンス内の情報交換は、この支部長を中心として行われているが、電話の普及率や郵便事情などにより、まだ確実とは言えない。今回の我々のホームステイも、比較的本部との連絡を密にしている。セブ島の支部に受入れていただいたが、ゆくゆくは相互交流の観点から、すべてのプロビンスで受入れ可能な状況をつくり出すことを、目標としている。

本部では、月1回の定例会と、必要に応じて臨時の委員会を開催している。次に本部で行っている主な事業について説明したいと思う。

まず第一に「PAJAJFA」の自立のための資金集めが重要な課題であり、様々な活動を模索中である。

第二に「プロフェッショナル デベロップメント セミナー」の開催がある。これは、例えば日本の経営技術を取得するための研修会を開催するとか、企業間の情報交換会を開催するというような事業である。

第三には、ASEAN各国の同窓会組織との連携を図る事業がある。我々がマニラについた翌日にシンガポールで開催された会議に「PAJAJFA」の委員長が出席している。

その他には、スラムの人達が自立するために、必要最小限の資金を集めるための映画会を開催して、その収益を充てる計画や、青年同志の交流を深めるためのレクリエーション活動などがある。

以上、ごくおおざっぱに活動の内容を記してきたが、彼らの最終目標は世界平和であることが強調されていた。

次に、彼らの「21世紀のための友情計画」に期待することを、具体的なプログラムの内容などについて、いくつか報告したい。

まず、日本での合宿セミナーでは、日程（2泊3日）及び利用した施設については全く問題はないが、もっと討議などの交流のもてる時間を増やして欲しい、という要

望が数多く寄せられた。

次に、ホームステイに関する要望が多かった。彼らは、平均的日本人のありのままの生活を体験することに、基本的な目的を置いているので、特にお客様扱いをすることはやめて欲しいとのことであった。例えば、ホームステイ受入れのために、新しくベッドを購入する、などということはしないで欲しいということである。さらに出来れば、ホストファミリーについての、事前の情報が欲しいということがあげられた。これは、世帯主の職業や家族構成などについて、事前に知っておきたいと言うことである。女性参加者のホームステイ家庭の家族の中に、女性が一人もいなかったというような例があった、ということである。

しかし、全体的には、ほとんどの既参加青年にとって、ホームステイは、非常に貴重な楽しい経験として心に残っている、という意見が多かった。

さて、簡単に『PAJAPA』の活動状況や意見等を報告させていただきましたが、ここからは、私の今回のプログラムを通しての、体験と感想を述べさせていただきます。一言で言うなら、非常にバラエティーに富んだプログラムであったと言えます。

例えば、アフターケアチームの直接的な目的ではありませんでしたが、青年海外協力隊の隊員の皆さんが、活躍している現場を実際に見ることができて、大変感動しています。隊員の方々の苦労話をお聞きすると、日本が出来る技術援助はフィリピンにおいては、まだまだ様々な分野にわたって必要とされていることを感じました。

また、この種の事業で必ず行われる公式行事（表敬訪問等）でも現地の人達、特に青年層に触れ合う機会が多く、ありきたりの公式行事に終わらなかったのが良い印象として残っている。

例えば、パテロス市長表敬訪問の折には、市長さん自らに町の中を案内していただき、地場産業の小さな工場や保健所、小学校や中学校まで、はてはスラム街まで案内していただいた。生活感あふれる町の中を歩いて見学することにより、市民生活を肌で感じる事ができた。

また、それぞれの場所で、そこに働く人達や子供たちと話をする機会を得て、パテロス市を理解する上でとても参考になった。

市長さんのご好意で、昼食は市長さんの自宅へ招待していただき、家族の皆さん全員に歓迎していただいた。日本では、とても食べられない“バルット”と呼ばれる卵料理も出てきて、皆んな感激していた。

最後に、市長さんが言われたことが、とても印象に残っている。『私は、皆さんに町のきれいな所だけを見ていただいたのではなく、きたない所（スラムなど）も見てください、ありのままのパテロスを見ていただき、理解してほしい。また、セキユ

リディーもつけずに町中を歩くことは、市長として非常に危険であるが市民にとって身近な市長でありたい。』とおっしゃっていた。



もう一つの例をあげれば、N. M. Y. C. (NATIONAL MANPOWER & YOUTH COUNCIL)〔青年のための職業訓練センター〕訪問の折には、見学が主体であると思っていたが、担当官のご配慮により、そこで訓練を受けている青年たちとのディスカッションの場を設けてくださったのは、青年たちの実態を知る上で、大変貴重な経験となった。また、そこで知り合いになった青年たちが、我々の滞在しているホテルまで来てくれ、自由時間にマニラ市内を案内してくれたことにも感謝しているとともに、予期せぬ青年達との交流に喜びを感じている。

今回の日程の中にも、確かに観光的要素が少しはあったが、サンチャゴ要塞やサン・アウグスチン教会などは、フィリピンの歴史を知る上で非常に重要な施設であり、必ず「PAJAJFA」のメンバーが同行し、熱心に説明をしてくれた、史跡めぐりを通してもかれらの愛国心を強く感じた。

さて、何と言っても強烈な印象だったのは、ホームステイである。ホームステイでの私の体験と感想を述べたいと思う。

まず、私の受入れ家庭についてご紹介したい。私のホストファミリーは、昨年このプログラムの“TEACHERS GROUP”で来日した、ラモン・シリル・スカリトさんであった。彼は、32才でセブ市サウスウエスタン大学歯学部教授で、奥さんと、4才の息子と2才の娘の4人家族である。現在は、セブ市の中心地にアパートを借りて住んでいる。

彼のアパートが手狭と言うことで、少し郊外にある彼の両親の家に御世話になることになった。父親は仕事の関係でミンダナオ島へ単身赴任しており、母親のシャリトさん(52才)、弟のフランツさん(24才)それにメイドが3人、計5人で住んでいる。ラモンさんは7人兄弟で、そのうち2人の兄弟はマニラに住んでおり、セブ島在住の妹や弟達が夫婦でよく母親を訪ねてくる。

かなり古い家だが、大きい家である。地下がダイニングキッチンとメイドの部屋、1階に応接セットが2セット置けるリビングと書斎、2階にツインのベッドルームが2つそれに増築したメイドの部屋、もちろんベッドルームには温水シャワーとトイレがついている。

昨年の台風で、地下のダイニングが、ほとんど水に浸かってしまったということである。現在は、修復しているが、電気洗濯機等の電化製品は故障したままである。

私は、弟のフランツと同じ部屋で2日間過ごすことになった。

食事は、初日の夕食に歓迎会を兼ねて、地元の人しか行かないフィリピン料理のレストランへ連れて行っていただいた。その外は、帰る日の昼食の中華レストランでのさよなら会を除いては、すべて、フィリピンの家庭料理を御馳走していただいた。

母親のシャリトさんは、私に対して非常に好意的であり、常に気を配り、実の息子のように扱っていただいた。家の中では、小さい子供たちの英語力向上のために、できるだけ英語を使っているので、言葉に関する不自由は感じなかった。

滞在中ラモンさん一家は、毎朝実家を訪ねてきて、母親と弟のフランツと7人で常に行動を共にしてくれた。時々、妹のアグネス夫妻が子供と連れ立って遊びに来た。家族の絆が日本より強いのではないかと感じた。

フランツとは2日間、同じ部屋で寝食を共にしたせいか、お互いに親近感を覚え、彼が、朝早くマーケットや教会やスラム街へ連れて行ってくれ、観光では絶対に見ることのできない、セブ島の人達の本当の生活の姿を見せてくれた。

スラムの人達は、小さい子供たちから大人まで、ドブ川と言っていいほど匂いのする川で、洗濯や行水をしていた。彼らは、椰子の葉で造った小さな家に大家族で住んでいる。しかし、どの家からもラジオかカセットテレコか分からないが、ポピュラー音楽が聞こえ、子供たちも笑顔で元気に遊んでいる。何故か不思議な気持ちになった。

また、川を渡ってスラム街を抜けると、洞窟の中にある教会があり、そこで知り合いになった地元のボーイスカウトの子どもたちと交流することができた。彼らの目的はボランティア活動らしい。フランツとは、每晚3時すぎまで、お互いの生活、仕事、習慣、家族、趣味などのことについて話をし、時のたつのを忘れてしまうほどであった。

2日目にマクタン島のリゾートへ、海水浴に連れて行っていただいた。偶然にも他の2つのホームステイ家族と一緒にになり、それぞれの家族の特徴が分かったり、家族同志の交流の場となり、大変楽しく過ごした。

また、ラモンさんの子供たちとも水遊びや砂遊びを通して、お互いにより親密感がわき、帰りの車の中では4才の長男のアイドリックが私の膝の上にとずっと乗っていたほどであった。

最終日には、お母さんから沢山の民芸品のおみやげと、地元産のドライマンゴー等のお菓子をいただいた。また、空港近くの中華レストランで「さよなら昼食会」を開いていただき、大変恐縮した。

ラモンさんの配慮により、今回のこの大家族ぐるみのホームステイプログラムとなったわけであるが、彼の子供たちもよくなついてくれて、我が子のように感じた。また、彼の母親をはじめ、兄弟たちにも快く受け入れていただいたので何不自由なく、大変快適に過ごせた。

この2泊3日の間、セブアノ気質の素晴らしさに触れ、感激のしどうしであった。また近い将来、必ずセブを訪れて、この素晴らしいセブアノ気質に触れたいと思わせるホームステイであった。

ホームステイについては、フィリピンの既参加青年たちの意見も前述したが、基本的には、相互交流という立場で行うほうが良いと思う。フィリピンの生活習慣を知り、日本で受け入れる、また日本の生活習慣を知ってもらい、フィリピンで受け入れてもらう。または、相互に行き来することが無理な場合でも、生活習慣の違いで誤解を招かないように、お互いに、それなりの知識を得ようと努力をすることは大切である。

ホームステイプログラムは観光旅行では、絶対に味わえない現地の人達の本当の生活の姿や人間性に触れることが出来る。

また、一度ホームステイを体験した人は、今度は個人レベルの交流でのホームステイもできるようになる。このようにして、若い世代の交流の輪がどんどん広がっていけば、日本・フィリピン間の悲しい戦争の歴史も少しづつ癒されていくのではないだろうか。

私自身、今回、私を受け入れてくださった家族の方々にまた会いに行きたいと考えている。

私にとって今回のホームステイは、自らの生活を見直す大変良い機会であった。またあらためて、『21世紀のための友情計画』の素晴らしさを実感するとともに、自らももっと積極的にこの事業に参加・協力していきたいと感じた。

今回、このような素晴らしい機会を与えてくださった、日本青年団協議会、及び現地で大変御世話になったJICA事務所の方々、並びに『PAJAJA』のメンバーの方々に心から感謝申し上げるとともに、この事業を支えてくださっている、全ての方々のご活躍とご健闘をお祈りし、報告書とさせていただきます。

#### (4)愛媛県青年団連合会 三好 貢義

僕にとってこのフィリピンアフターケアプログラムが初めての海外旅行だったので。その初めての海外旅行先がフィリピンになるとは思っていませんでした。たぶん新婚旅行で行くハワイあたりが最初の海外旅行になるだろうと思っていました。が、いざ行ってみると僕がもっていたフィリピンのイメージとはずいぶん食い違いもあり、今回このアフターケアに参加出来て本当によかったと思いました。

百聞は一見にしかずとはよく言ったもので出発前のイメージはすごく治安が悪く、フィリピン人の日本に対するイメージはかなり悪いだろうなあとと思っていたのですが、意外にその反対で青年たちのほとんどが機会があれば日本へ行きたいという気持ちを持っていました。ただ、悪いイメージがまったくないわけではなくどうしても日本人はお金持ちというイメージだけはほとんどの人が持っているようで、日本へ行きたいという理由もこのへんにあるようです。が、とにかく僕のフィリピンに行つての感想はかなりよかったと声を大にして言いたい気持ちです。フィリピン人の人の良さと、気の永さ(フィリピンタイム)はフィリピンらしくていい一面ではないかなと思います。

まずフィリピン国際空港について機内から出たとたん“むっ”とした熱気に包まれました。まあ30度もあるのだからしかたないのだけれど、思ったよりは湿度が高いような気がしました。空港を出てJICAに手配してもらった車に乗り込みまずはホテルへ向かった。ホテルまでの道すがら車窓から見た景色は整備しきれていない住宅街の様でその家並みを見るとこの国の生活が想像できるようでした。

ホテルについて驚いたのがロビーに入る際に荷物をすべてチェックされることでした。まさか空港でさえ開けなくてよかったカバンをホテルの入り口で開けて見せなくてはいけないなんて想像もしませんでしたから。その後ホテルを出て帰ってくる度に荷物のチェックを受けるわけなのですが、治安のいい日本に住む私達には不自然でもこの国ではこれが当たり前、当然のようにホテルの周りのスーパーとかレストランにも入口にはガードマンが目を光らせていました。ライフルをもって立っているガード



マンまでいたときにはさすがに驚き、日本の常識は通用しないなあーとつくづく思いしらされました。

まず最初に訪問した先が JICA の事務所でした。事務所では竹内氏より JICA がフィリピンでどのような活動をしているのかなどを聞き、日本で外国青年を受け入れはするけれどそのほかどんな活動をしているのかあまり知らなかったのが、フィリピンに対し技術協力をしたり、無償で多額の資金協力をしているとの説明を聞きフィリピンに対し、かなりの協力をしていることを恥ずかしながら初めて知りました。が、中には無駄になっている援助もあるようで協力協力といってもよくよく考えて行わないとうまくいかない部分もあるように思った。また、研修員受け入れ事業とか、青年招へい事業では今までで六千人ほどの研修員及び青年を受け入れているということなので日本で身につけた事を活かしてもっともっとフィリピンを発展させてほしいと思いました。

NMYC ではこの施設のビデオを見せてもらった後、施設を一通り見てまわりました。自動車整備士の施設に始まり、電気、コンピュータ関係、縫製関係、ホテル関係など数多くの職種の訓練を行っていました。最後に見学したのがフィリピンではかなり優れているものとして皮製品の加工から製品になるまでの工程を見ました。またここでは製品に加工する際必要な接着剤の強度試験を行ったりする試験室もありかなり設備の整った施設でした。この施設の訓練生は主に現在仕事をしている者が多く勉強をしに来ているとのことで、夜間みの部署もありました。そしてこの施設では企業の要望にもそって要望にあう技術者の育成も行っており、施設の卒業生の就職率はほぼ 100 パーセントということで訓練生の目は真剣そのものでした。

次に訪問したのがテレフォンカンパニーでした。この会社では 3 名の帰国青年に会い彼女たちの上司でマネージャーのエヴィリンさんに会社説明をしていただき建物の中を案内してもらいました。そしてフィリピンの電話の普及率の低さを聞き、今現在家庭に電話器のある家は裕福な家庭だということでした。今や日本では各部屋に電話が 1 台の時代になっているときにフィリピンでは公衆電話もほとんど無い状態でした。

そのほか帰国青年の務める職場をいくつか訪問して貴重な体験をすることが出来ました。数ある貴重な体験の中で一番フィリピンらしさを味わえたのがホームステイだったので最後にセブ島での 2 泊 3 日について書きたいと思います。

22 日、セブに着いた時空港に迎えに来てくれたのがバレリーと彼女の妹でした。2 人は運転手と共に日本製の 3 人乗りのボンネットのあるトラックで迎えに来てくれました。僕は荷物を荷台におき 3 人も荷台のシートに座りバレリーのうちへ向かった。30 分くらい走って家に着くと彼女の母親が出迎えてくれた。最初運転手を父親だと

思っていたのだけれどどうも様子を見てみると違っていた。家に入ると彼女が僕がこれから寝泊まりする部屋へ案内してくれた。その部屋は部屋の中の感じからして弟の部屋らしくわざわざ僕のためにあけてくれたようであった。で、しばらくすると彼女が食事の用意ができたから、と知らせに来てくれたのでおりていきました。食卓は中華料理屋のように円形でターンテーブルが付いて、バイキング形式で自分の食べたいものをとって食べるようになっており、何で食べるかというやはり、右手にスプーン左手にフォークで食べました。箸も用意はしてもらっていたけれどここはフィリピンだということで箸は使いませんでした。

食後は、日本から持ってきたお土産をプレゼントしたりお互いの家族のこととか僕の住んでいる愛媛県のとくに大洲の話などをしました。その時、大洲の鵜飼いのことを話すと興味ぶかそうに聞いていました。あとはお互いの仕事のこととか、給料はどのくらいもらっているのかとか下手な英語で辞書を引き引き話しました。彼女の母親は英語はあまり話せないようでしたし、父親は叔母さんの家へ行って留守でした。母親は途中でねてしまったので3人で話していると弟が帰ってきたので4人で30分くらい雑談をして12時ごろ“明日は6時起床よ”ということで寝ました。

この日の朝はとなりの家のニワトリの鳴き声で目がさめました。それも5時すぎです、夜はそれほど寝苦しくも無くよく眠れたのですがこのニワトリだけには二日くらいでは慣れません。7時に朝食をすませて8時にはビーチへ向けて出発しました。昼食はビーチで食べるということなので道具を積み途中で飲物だの氷だの買って最後に寄ったのがマクタン島のラブラブにある市場でした。ここでミルクフィッシュとかスイカ、トウモロコシなどを買って Duawan Beach Resort (日本でいう海水浴場)に着くまでに2時間もかかってしまいました。でもラブラブの市場は賑やかで、人、車、トライスクルがたくさん往来しておりすごく賑やかでした。せっかくのビーチだったので残念なことに、この日の天気は曇り、海につかると寒いくらいでした。でも、海で食べる食事はまた格別で市場で買った魚もおいしくフィリピンの食事もなかなかおいしかったです。(手づかみで食べるのもまたいい)

2時には引き上げ夕方、マジェラン・クロス、サン・オーガスチン教会、道教寺院などを案内してもらった。

僕の場合はホストファミリーが女性なのでかなりお互いが気を使ったような気もしました。もっと僕が英語に堪能だったら内容の濃い話もいろいろ聞けただろうな、と思うと残念な気がします。ぜひもう一度行ってみたいと思います。

(5)日本青年団協議会 福田 淳

1991年2月19日～28日の10日間の日程で、5名の調査団の一員として、フィリピン、マニラ・セブの2つの都市を中心に「21世紀のための友情計画」青年招へい事業のアフターケア調査団としてフィリピンを訪問することができ、私の日常的な仕事の面でも大きな成果をあげることができました。

今回、フィリピンを訪問して感じたことは、「21世紀のための友情計画」青年招へい事業に参加した青年全員が、以前にもまして日本に対し強い関心を抱き、出会った青年の中には現在も日本滞在中のホームステイの家庭と手紙等で交流を続けている青年もいました。

さらに、マニラでの各訪問地ではフィリピンの文化、経済、歴史等に触れることができ熱烈な歓迎をも受け、セブでのホームステイではフィリピンでの生活習慣を実際に体験する機会に恵まれました。

私たち調査団全員は、1984年から始まった「21世紀のための友情計画」青年招へい事業は、いくつかの障害を乗り越えて今日まで両国青年同士の友情を築き上げてきたことは、21世紀に向かっての時代を先取りする先駆的な意義があったと確信しました。

このような経験を生かし日本の青年に対し国際交流の意義、重要性などについて呼びかけ、今後も積極的に国際交流に取り組んでいきたいと決意を新たにしています。それは、21世紀新しい国際化時代に生きる私たちの責任でもあります。

最後に、このような素晴らしい機会を与えて下さった国際協力事業団の方々及びフィリピン PAJAFPA の方々に心から感謝いたします。



インドネシア

平成3年3月7日～3月16日

社団法人 勤労厚生協会



1. 調査チーム派遣概要

1-1 調査チームの構成

	氏名	生年月日	性別	所属先
チームリーダー	荒木 秀子	昭和 18.12.13	女	群馬県前橋市大手町 1-1-1 群馬県商工労働部労政課
メンバー	沢柳 宏文	昭和 27.7.1	男	愛知県名古屋市中区 三の丸3-1-2 愛知県労働部労政福祉課
メンバー	高木 英男	昭和 36.1.15	男	東京都渋谷区代々木神園 町3-1 国立オリンピック記念 青少年総合センター
メンバー	伊藤 達夫	昭和 38.11.10	男	東京都港区芝浦 1-1-1 東芝ビル15F 東芝ツーリスト(株)
メンバー	醍醐 和恵	昭和 39.5.28	女	東京都新宿区市ヶ谷本村 町42 経済協力ビル別館 (財)国際協力サービスセン ター

## 1-2 調査日程

3月7日(木)

11:00 GA873にて成田出発

16:20 ジャカルタ スカルノハット空港着。

KAPPIJA メンバー5名マイクロバスにて出迎え。



18:00 プレジデントホテル着。

通訳の石橋八千代さん始め KAPPIJA メンバー出迎え。

20:30 プレジデントホテルにて、KAPPIJA のリーダーMr. Irwansyah 始め約  
8名とミーティング

3月8日(金)

9:00 JICA インドネシア事務所訪問。参事の椎名のり子氏のオリエンテーション。

9:20 所長の北野康夫氏と対談。

10:10 在インドネシア日本大使館表敬訪問。一等書記官 畠 薫氏と対談。

13:25 青年スポーツ省表敬訪問。

BUDIPRAYITNO 第4 補佐官と対談。



- 14 : 07 青年スポーツ省大臣面会, 対談。
- 14 : 30 KAPPIJA と打合せ及びオリエンテーション。
- 18 : 00 偶然, 青年スポーツ省で行われた結婚披露宴に招待される。



### 3月9日(土)

- 9 : 30 グヌン第5小学校視察。
- 14 : 40 サリナ ビルディング プロジェクト視察 (KAPPIJA のリーダー  
Mr. Irwansyah の職場)
- 16 : 20 PELITA 新聞編集部視察。

### 3月10日(日)

- 8 : 15 マイクロバスでバンドンに向け出発。途中, タマン・ミニ公園見学。  
KAPPIJA メンバー 3名随行。
- 16 : 45 バンドン着。バンドン KAPPIJA 支部長 Drs . WAWAN 始め 8名出迎え。  
日程説明。
- 17 : 40 バンドン KAPPIJA メンバーのアティさんの家にて夕食をごちそうになる。
- 18 : 30 ホームステイ

3月11日(月)

- 9:00 AROMA社(割り箸工場)見学
- 14:00 バンドン教育学校見学。
- 16:30 活火山タンクバン・プラフ見学。
- 18:00 チアトウル温泉見学。

3月12日(火)

- 9:15 バンドン発。ホストファミリー、KAPPIJAメンバー見送り。
- 14:00 ジャカルタ着。
- 18:30 サリ・バシフィックホテルにて交流パーティ。

3月13日(水)

- 10:15 青年スポーツ省にてKAPPIJAメンバーとミーティング。メンバー13名参加。
- 19:00 GA873便にてバリ島へ向け出発。
- 20:45 バリ島着。バリKAPPIJAメンバー3名出迎え。
- 21:15 サヌルビーチホテル着。

3月14日(木)

- 9:20 バトウブランにてパロンダンス観賞。
- 11:30 バリ最古のヒンズー教寺院、プサキ寺院見学。
- 18:00 バトウブランにてケチャックダンス観賞。

3月15日(金)

- 9:00 自由行動(水泳・ショッピング)。
- 21:30 GA872便にてバリ島出発。石橋八千代さん見送り。

3月16日(土)

- 9:00 成田着。

1-3 主要面談者

ジャカルタ

KAPPIJA 会長

Mr. Irwansyah

KAPPIJA メンバー

Ms. Anastasia S. H.

Mr. Eddi saputra

Mr. M. Rasyid Baronnst

Ms. Chamsiar

Mr. Wan Noverie, SE

Ms. Eliana

Ms. Dian Mardiani

Ms. Ima Abidin

Ms. Andromeda

Mr. Zulfadli Barus

Ms. Retno Tjahjiani

JICA インドネシア事務所

所長 北野 康夫氏

次長 佐藤 幹治氏

参事 椎名のり子氏

日本大使館

一等書記官 畠 薫氏

二等書記官 萬浪 清豪氏

青年スポーツ省

スポーツ大臣 Mr. IR. AKBAR . TANDJUNG

第4補佐官 Mr. Bapak Budi Prayitno

グヌン第5小学校

校長 Ms. ラハユニンシ

PELITA 新聞社

編集長 Mr. Purnama

社員 Mr. Syakirul

バンドン

KAPPIJA 支部長

Drs . Wawan Dewanta

KAPPIJA メンバー

Mr. Deden R. Rumaji

Dra . Rr Ratna

Dra . Estiningtias

Ms. Winiasih

バリ

KAPPIJA メンバー

Mr. Iketut Suyasa

Ms. Ida Ayu Widi Astiti

Mr. Ketut Guntur Agung

## 2. 調査の要約

- (1) 同窓会 (KAPPIJA) メンバーとの交流を通じ、彼らが日本滞在中に受けた影響や学んだ成果を、帰国後、青年達の職場、あるいは生活等にどのように生かしているか。  
また、同窓会の活動状況はどうか。
- (2) JICA インドネシア事務所、在インドネシア日本大使館及び青年スポーツ省を訪問し、日伊関係の現状、「ASEAN 青年招へい事業」の評価、青年達の行動、性格等の把握、スポーツ等を通じ、国造りにかける意欲などの調査。
- (3) ホームステイを通してみる家庭生活、日本の家庭との相違点等。
- (4) その他インドネシアを訪問しての感想、気づいたこと等。

## 3. 現地活動報告

### 3-1 表敬・訪問先における意見交換内容

3月8日(金) 午前 JICA 訪問

JICA 事務所は、我々が宿泊していたプレジデントホテルに隣接し、大使館にも近く、便利な立地条件にある。事務所は、2年程前に新築・移転されたそうである。

9時に椎名のり子参事と日程の打ち合わせをし、9時20分北野康夫所長と会見する。訪問団の各自自己紹介の後に、団長・副団長より今までの日本の受け入れ状況の報告をする。この計画は、竹下総理が5年間延長することを約束され(昭和62年当時)、第2フェーズの2年が終わるが、まだ続く事業であり、平成3年度もよろしく、と所長よりお話がある。また、インドネシアでの日程をお尋ねになり、病気、水、盗難に気を付けるようアドバイスをして下さる。なお、青年海外協力隊員48名がインドネシア各地で活躍していると伺う。

3月8日(金) 午前 日本大使館表敬訪問

10時10分に畠薫一等書記官、広報担当の萬浪清豪(マンナミキヨタカ)二等書記官と会見する。

JICAの椎名参事より訪問団のインドネシアでの日程とKAPPIJAの状況等の説明があり、団長よりこの度の目的の説明がある。

日本側からは、来日する ASEAN 青年が、前もって分かっていたら青年に合わせて訪問先も選べる。メンバー決定の際、1 ヶ月位前しか来る青年が分からないので、ホームステイでも困る。人数が多いので、調整に時間がかかり、難しい問題ではあるが、ビザを取るのもぎりぎりになり、大使館にもご迷惑をおかけすることにもなる。

また、人選の面で、メンバーラでは、全国に声を掛けていたそうだが、勤労青年だとジャカルタに集中するので、もっとインドネシア各地から参加して欲しいと希望する。

これからも長期的視野に立ち、インドネシアと日本のために活躍する、良い人物に交流してもらいたいと、話を結ぶ。

### 3月8日(金) 午後 青年スポーツ省 (MENPORA) 訪問

13時55分 プディ第4補佐官と懇談し、14時7分 青年スポーツ省大臣と会見が始まる。まず、団長より、訪問団の調査目的の説明があり、訪問団員も日本で交流したメンバーであり、これからも両国の友好関係の発展を祈る旨の挨拶をする。

スポーツ大臣は、訪問団に対して、心から歓迎の意を表される。以下、

スポーツ 21 世紀のための友情計画は大変、素晴らしく、この計画によって、両国の協力・友好関係は、いっそう強固なものになると、確信する。

この事業は、政府間レベルだけでなく、社会のレベルでの交流を行い、未来の指導者たる青年達に重点が置かれていることは有意義なことである。

この事業を感謝し、継続を希望し、青年達が得た経験と知識を有益に日本の生活文化・経済をインドネシアに生かしたい。

日本の発展の要因たる、すぐれた人的資源と勤勉を学ぶ。

日本の青年にも、たくさんインドネシアへ来て、インドネシア社会に溶け込んで、理解して欲しい等述べられる。

又、インドネシアの 21 世紀のための友情計画参加者 1409 名が 27 州に分かれて KAPPIJA を組織し、会合、ディスカッション、日本語学習等の積極的活動をし、日本を理解しようとしていると、KAPPIJA の紹介をされる。

最後に、訪問団の日程を尋ねられ、ジャワ文化の中心であり、観光資源がたくさんある、ジョクジャに行かれなくて残念ですね。と締め括られた。

### 3月9日(土) 午前9時30分小学校視察

グヌン第5小学校は、生徒560人、教師16人(ラハユニン校長を含む)である。

この学校は、7時～12時まで午前の部、12時30分～17時までの午後の部の2部制である。副校長による教師の紹介のあと、この小学校を訪問した人達のサイン帳を見せて頂いたが、3年前のメンバーもここを訪れており、懐かしく感じた。次に、各学年の音楽、図工等の授業風景を参観する。それから、子供達には、サイン攻めに会い、

まるで、タレントになったような気分であった。最後に子供達と記念撮影をし小学校を後にした。

### 3月9日(土) 午後 青年職場視察

14時40分 サリナ (Sarinar) デパート建設現場を視察する。イルワンシャ (KAPPIJA 会長) さんが、この建設プロジェクトの責任者であり、会社組織とスタッフの案内をして頂く。その後、工事現場を見学する。



16時20分 ペリータ (PELITA) 新聞編集部を訪問する。ここは、KAPPIJA のメンバーであるフェリーさんの職場である。ここでは、プルナマ編集長よりお話を伺う。インドネシアの新聞は、全部で200種類あり、300万部刷られているそうである。その他、インドネシアの新聞の様子や、ペリータ新聞の由来や内容を伺う。

### 3月11日(月) 午前 割り箸工場

応接室には、スハルト大統領・スタルモノ副大統領の写真とインドネシアのシンボルであるガルダとがあり、大統領と副大統領の偉大さを垣間見た。

工場は、製造過程においては、機械化されているが、割り箸の仕分けや、梱包は、人手に頼っているため、多くの青年達が従事している。割り箸の是非においては、日本国内でも、議論の余地があるが、個人的には、木材を無駄無く利用し、多くの青年

達が、働ける場所になるならば、良いのではないかと思う。因みに、この工場では、木くずは、燃焼用として利用され、おがくずは、他の工場で再利用されるそうである。私は、ここで、割り箸ではなく、湾岸戦争で使用する、兵器や、部品をせっせと造っていたとしたらと考えるとこの工場が割り箸工場で良かったと思う。

### 3-2 帰国青年同窓会等の活動状況

#### 3-2-1 インドネシア同窓会年表

現在までのインドネシア同窓会の主な出来事は以下のとおりである。



年月日

1985. 3. 18 第一回総会

・「IKATAN ALUMNI INDONEASIA JEPANG」(インドネシア日本同窓会) 設立

・委員選出(会長 SAMUSUDDIN 任期1年)

1986. 1. 30 第二回総会

～ 2. 1 ・「KELUARGA ALUMNI PERRSAHABATAN INDONESIA JEPANG」  
(インドネシア日本友好同窓会) KAPPIJA21 に改称

・委員改選(会長 DARUL SISKI 任期1年)

- 1987 ジョグジャカルタ支部設立記念式典
- 1988 第三回総会  
・委員改選 (会長 YAN HIKSAS 任期 2 年)
1988. 2 「AJAFA21 年次実行委員会総会」インドネシアにて開催
1990. 12. 14 第四回総会  
- 12. 16 ・委員改選 (会長 Mr. IRWANSYAH TANDJUNG 任期 2 年)
- 3-2-2 1991-93 年 KAPPIJA21 委員名簿

現在の委員は以下のとおりである。

アドバイザー	青年スポーツ省大臣 Mr. IR. AKBAR . TANDJUNG	
カウンセラー	ERIGJEND. D. BUDIPRAYITNO	
	RUDY JOHANES, SH	
	TJARYO KUMOLO , SH	
	IR. HARRIS ALI MOERFI , M . SC.	
	YAN HIKSAS, SE	
	PATRIALIS AKBAR , SH.	
会長	IR. IRWANSYAH TANDJUNG	
書記	ANDROMEDA AZANNATARI, SE	
会計	DRA. MAISURI RAIS	
副会長	CHOIRUL ANAM, MZD	DRS . YUSRA KILUN
	ZULFADLI BARUS, SH	H . SYARIFUDDIN SOELTAN
	DRS. MANSYUR M . ILYAS	DRS . GHEIS CHALIFAH
	IR. DEDY MARDANA	DRS . ISRIN CHANDRA
	EDDY SAPUTRA, SE	
副書記	FEPDIANSYSH	CHAMSIAR, B , SC.
	DRA . ANASTASIA SHP	DRS . MANSUR
	SOFYAN ACHMAD , SH	LILIK S . HARYANTO
会計補佐	HARI AMPERA K .	ACHMAD AFFAN
	DIAN MARDIANI	IR. A . LINDA
会員組織部	MDH . SUKRI	TAUFIK LATJUSA
	IR. ALFAREZA	
教育研究開発部	DRS . FAUZI BOESTAMI	ARISE AGUSDHANI
	DRS . RIDWAN HASSAN	
スポーツ部	ALFEUS SIREGAR	NICODEMUS EMMANUEL



	ABDUL HAKIM T .	
旅行部	ELIANASULAIMAN	NISFAL
	ELLA UMI MARJILAH	
社会文化部	IR. HANDITO HADI JOEWONO S . E . SHOMI	
	VIDA AJULIANTI	
外務協力部	DEDEN RUKMANA	AKRAR DESRINA EMMA
	ARITONANG DRS . JONED CELENDRA	
広報報道部	R. A. YANI TRIHANDAYANI, SH	YANI WAHYUNING MURTI
	WAN NO VERIE	
社会福祉部	MUSLIMAH ABIDIN	AINUN HASANAH N .
	DWIKORA PUTRA N .	
財務部	NANA YULIANA	SARI AWALIA
	TEUNGKU PARAMESWARA , SH.	

### 3-2-3 KAPPIJA21 各部の業務

現在、インドネシア同窓会の組織は3-2-2のとおり会長1名、副会長9名、書記1名、副書記6名、会計1名、会計補佐4名の他、9つの部門より成り立っている。各部の業務は以下のとおりとのことである。

#### 会員組織部 (Department of Organization and Membership)

- 1 同窓会組織の課題点について検討。
- 2 インドネシア全国の同窓会支部の調整

#### 教育研究開発部 (Department of Education , Research and Development)

- 1 第3回「インドネシア日本21世紀研究」の継続
- 2 日本語コースの実施 (1991年2月より)
- 3 インドネシア青年の日本理解についての調査実施

#### 広報報道部 (Department of Public Relation and Press)

- 1 「PERSAHABATAN21」誌の発行
- 2 報道、ジャーナリストトレーニングの実施

#### 社会文化部 (Department of Social and culture)

- 1 日本インドネシア週間の実施

#### 財務部 (Department of Treasure)

- 1 同窓会活動財源の確保

## 旅行部 (Department of Tourism)

- 1 同窓会カウンターパートのインドネシア訪問受入れ
- 2 ホームステイの実施

## 外務協力部 (Department of Foreign Affair Cooperation)

- 1 国際的役割、問題の検討
- 2 同窓会組織をインドネシアの学生と青年の日本学習の中心にする
- 3 日本再訪問計画の支援

## スポーツ部 (Department of Sport)

- 1 テニストーナメントの実施
- 2 ジュニア空手トーナメントの実施

## 社会福祉部

- 1 健康維持サービス、職業訓練等の社会奉仕活動の展開

### 3-2-4 KAPPIJA 会員国内分布

現在、インドネシア国内のKAPPIJA21会員の人数は表1のとおりである。

### 3-2-5 1990年の主な活動

KAPPIJA21は、1990年に大きく分けて以下のような活動をおこなった。

- 1 インドネシア国内の一青年団体としてのインドネシア国内の各種青少年運動に参加
- 2 ASEAN青年招へい同窓会の一員として各種活動に参加
- 3 KAPPIJA21のみの活動

#### 1の具体例としては、

- ・KNPI (次章4日訪問国における青少年団体の活動状況)参照)主催の「ASEANユース リーダーシップ トレーニング」に代表者1名が参加。(1990. 2. 12 - 2. 15)
- ・インドネシア外務省主催の「国際関係コース」に代表者2名が参加(6. 10)
- ・インドネシア青年スポーツ省主催の「青年月間展」に参加(10. 21 - 10. 28)

#### 2の具体例としては、

- ・シンガポール青年招へい同窓会SAJafa主催でシンガポールにて実施された「ASEANユース キャンプ」に代表者5名が参加。

#### 3の具体例としては、

- ・日本からの各種訪問団の受入れ
- ・滋賀県彦根市の招聘に応じ11名が再訪日(9. 19 - 9. 29)
- ・「インドネシア日本そして21世紀」セミナーの実施(10. 21 - 10. 28)

・KAPPIJA 総会 (12. 14 - 12. 16)

・青年海外協力隊隊員講師の日本語コースへの参加などがある。

なお日本からの訪問団としては(株)日本国際生活体験協会 4 名 (2. 12 - 2. 15), 九州・山口経済連合会 ASEAN 諸国経済視察団 15 名 (3. 10), 滋賀県彦根市 2 名 (4. 24), 水戸第一高等学校生徒 20 名 (6. 7) 等があったようである。このうち、九州・山口経済連合会からは、JICA に便宜供与依頼があった。

日本語コースは、青年海外協力隊の活動として、ジュニアエキスパートの隊員がインドネシア青年スポーツ省内で週 2 回 (月、水) 午後 6 : 00 から日本語の授業を実施しているが、このコースが今のところ「KAPPIJA21 の日本語」ということになっており、受講者は KAPPIJA21 会員のみになっている。

### 3-2-6 1991 年の主な活動予定

昨年、シンガポール同窓会 (SAJAF A21) が第一回を実施した AJAF A - 21 REGIONAL YOUTH CAMP の第二回を本年インドネシアで実施することが 91 年 2 月 19 日から 24 日に開催された第 4 回の AJAF A - 21 年次実行委員会総会にて決定した。

インドネシア青年スポーツ省のプデイ第四大臣補佐官によれば、西ジャワのユースホステルにてスポーツ交流、ディスカッション、レクリエーション等を実施する予定とのことである。イルワンサ KAPPIJA21 会長は、インドネシアの各地方 (スマトラ、ジャワ、スラウエシ等) の伝統舞踊紹介、インドネシアの伝統武術である SIM LAM BA 等の紹介などを含んで、1991 年の 9 月から 10 月頃一週間くらいで実施する企画を考えている。これにはぜひ、日本からも参加してほしいとのことであった。

### 3-2-7 その他

KAPPIJA21 はインドネシア青年スポーツ省の 7 階に事務所があり、15 の地方支部をもっている。

	ASEAN 混成公務員	ASEAN 混成教員	公務員	学生	農業 青年	勤労 青年	教員	テーマ A	テーマ B	青年 指導者	計
ジャカルタ特別市	57	8	60	89	52	112	61	3	6	47	495
アチェ特別州			5	4	6	6	4	1		4	30
北スマトラ	1		3	9	6	6	7	1	2	4	39
南スマトラ			2	3	2	2	4	1	1	1	16
西スマトラ				1	2	3	5		1	4	16
ランブン	1			3	3	4	3		1	2	17
ブンクル		1	1		2		2			1	7
リアウ			1	2	2	2	2		1	1	11
ジャンビ				1	1		3		1	3	9
西部ジャワ	7		10	25	22	18	15	6	5	7	115
中部ジャワ	2		4	7	6	8	5	2		5	39
東部ジャワ	3		2	9	6	5	3	2	2	4	36
ジョグジャカルタ特別州			2	10	5	5	4	3	2	4	35
中部カリマンタン		1	1	1	2	1	2		2	1	11
東カリマンタン			1	2	3	2	3	1		1	13
西カリマンタン				3	3		1	1	1	2	11
南カリマンタン	1		2	2	2	2	4		1	1	15
南スラウェシ				5	2	2	4	1	1	2	17
中部スラウェシ			1	2		2	4		1	1	11
東南スラウェシ			1	1			1			1	4
北スラウェシ				3	3	5	5		3	5	24
西ヌサテンガラ			2		5	2	6		1	3	19
東ヌサテンガラ			1	2	2	1	2			2	10
バリ	1		1	1	2	1	2			3	11
マルク			2	1	3	3	3		1	4	17
西イリアン				3		2		4		1	10
東モチール				2	1	3		3		2	11
計	73	10	102	191	143	197	155	29	33	116	1049

### 3-3 セミナー・交流会実施状況

#### (1) ジャカルタの「KAPPIJA (カピジャ) メンバー」との交流会

##### ① 空港での出迎え。

3/7 スカルノハッタ空港に KAPPIJA メンバー 5 人が横断幕を揚げ出迎えてくれていた。(KAPPIJA 会長のイルワンシャ他 5 人) そして先回りをして再びホテル入口で花束を持って暖かく出迎えてくれ、とても嬉しかった。

##### ② ホテルでの交流懇談

夕食後 (20 : 30), 他のメンバーが加わり (イルワンシャ他 7 人) ホテルで交流懇談。

・現在、青年海外協力隊の日本語の先生の下で、ジャカルタ KAPPIJA メンバー 40 人が、週 2 回 (18 : 00 ~ 20 : 00) 日本語の勉強をしており、今日その勉強会があって、終わったところであること。

・インドネシアへ来る日本の青年達の積極的な受け入れをしていること。

・昨年 KAPPIJA 役員の改選があり、イルワンシャが 4 代目の会長になったこと。

・明日からのプログラムは KAPPIJA メンバーが交替で案内してくれること。

・また是非日本へ行きたいこと。

等、22 : 00 頃まで話が弾んでいた。

##### ③ 青年スポーツ省での KAPPIJA との打合せ

3/8 14 : 30 から青年スポーツ省の会議室で行ったが、相互の自己紹介をした後は、打合せでなく、これが第 1 回のセミナーのようなものとなった。

KAPPIJA メンバーは 7 人 (後から 4 ~ 5 人が遅れて参加した)

・イルワンシャ (会長)

・エディ (副会長)

・アナスタシア (副書記)

・マンスス (ランボン支部長)

・ファウジー (調査開発チームスタッフ)

・アフアン (副書記)

・ユディ (事前研修担当)

##### ○ KAPPIJA の組織と活動についての説明。

・ KAPPIJA のメンバーは現在 1,408 人となり、9 部門に分かれ活動している。

(1) 組織部門

(2) 教育研究開発部門

(3) 広報部門

## (2) バンドン KAPPIJA との交流

3/10 バンドンまでジャカルタのメンバー3人(イルワンシャ, ラシド, ズルファドリ)が送ってくれ, 16時バンドンに到着, 11時頃からメンバー8人(ワワン, デデン, ウィニー, エディ, トウトウ, ディア, ティアス, ラトナ)が待っていてくれたこと, 今日の手配を組んであったが, すでに時間がなくなってしまったことを聞いて, 皆一生懸命やってくれているのに連絡が十分取れていなかったようで, 残念であったし, 申し訳なかったと思った。

- ・ バンドンの KAPPIJA メンバーは 53 人
- ・ 支部長はワワンさん
- ・ バンドン KAPPIJA の事務所はユースホテル内にある。

ホームステイ先を決めた後, アティさんの家で私達のために夕食のごちそうを用意しておいてくれたので皆で一緒にごちそうになった後, 夜演劇を見に行った。

翌日, 割りばし工場, 師範学校, 火山火口, 温泉へと1日中バンドンの KAPPIJA メンバー7人は2台の車に分乗し, 案内してくれた。

バンドンの KAPPIJA の活動は, ワワンを中心にまとまっており, バンドンの2日間とても親身になってお世話してくれた。

その他, 電気通信機器工場, 陶器工場等の見学も計画していたようであるが, 時間が足りなくて省略した。

見学の途中の車の中, 昼食時の懇談, ホームステイ等, 本当にインドネシア青年の中に溶け込んでみて, 皆の暖かさを感じた。言葉が自由に通じたらもっと深い交流が図れたのではないかと残念に思う。

## (3) 交流パーティ (3/12)

午後7時頃から始まったパーティは, JICA の椎名さんのご配慮でインドネシア料理がたくさん並べられ, お花もきれいに飾ってあり, これからの楽しい雰囲気盛り上げていた。そして日本のおそば, 天ぷらが用意されていたのには感激した。インドネシア青年たち30~40人ぐらい集まった。副リーダーの沢柳さんが「KAPPIJA メンバーの皆様には大変お世話になりました。青年スポーツ省, そして小学校, サリナデパート, ペリタ新聞, バンドンでのホームステイ, 割り箸工場, 温泉等, いろいろなところに訪問や見学をさせていただき, とても感謝しています。今後とも両国の友情がさらに深まり, インドネシアの国が益々発展することを祈っています」との挨拶をした。パーティには, 以前会った人達, この6日間いろいろ案内してくれた人達等が集まり, なつかしく話も弾んだ。バンドンで大変お世話になったワワンさんが4時間もの道程をわざわざ参加してくれ, 感激した。うつくしいバリ島の踊りの披露に答

え、私達は皆が良く知っている歌を用意し、一緒に歌った。後半では皆で手をつなぎ、肩を組んで歌い、盛り上がった。

#### (4) KAPPIJA メンバーとのセミナー (3 / 13)

(司会—日本側の伊藤さん)

まず、お互いの国をよく知ることが大切であり、今までの生活の中でこれだけは理解できないというものを出し合ってみたらどうかということで始めた。

インドネシア側メンバー (13人)

- ・イルワンシャ                      ・ダルノ
- ・アナスタシア                      ・ドウト
- ・マンスル                          ・ショミ
- ・スバルマン                        ・ヤン
- ・サブトト                          ・マイスリラリス
- ・エリアナ                          ・イカム
- ・アンドロメダ

##### ① インドネシアの生活習慣について

日本側質問

Q1. トイレで水を使うのは何故か。

A1. 宗教上から水によって清められるという意味がある。

Q2. ジャカルタの忙しさについて

A2. ジャカルタの人口 (840 万人) の多さによると思うが、さらに昼と夜の人口差が多く、日中は人や車が溢れている。また、そういう人達がどうやって生きていくか、という必要性に迫られていることからと思われる。

Q3. 運動、健康、食事について

A3. 政府ではスポーツ振興に力を入れており、勤労意欲を高める目的もある。食事については甘い物が好きである。

Q4. インドネシアでは男女差別がないようであるが。

A4. 歴史上でも女性は活躍しており、女性は尊敬されている。農村においても、女性は重要な役割を果たしているし、会社、大学、政府でも性差別は無く、役職についている。賃金も男女差別はない。

Q5. 民族文化継承について

A5. 国の政策として小学校のカリキュラムの中に組み込まれており、インドネシアの文化を大切にしていることと、統一国家となるために必要なものである。

インドネシア側質問

- Q 6. 「おしん」や「将軍」がインドネシアのテレビで放映されており、日本人の生き方が表現されているが、民俗性の強さはあるか。
- A 6. 「将軍」は日本で制作されたものではなく、少し感覚が違うところがあるが、日本人の民俗性を誇張して現しているが、間違っていないと思う。
- Q 7. 東京は世界の中心の都市であると思うが標識等に英語が使われていないが…
- A 7. 最近では大分多くなってきていると思う。
- Q 8. 日本との友好関係にあるカピジャは 15 の支部がある。プログラム終了後は民間レベルでのプログラムが必要ではないかと思う。
- A 8. JICA でもプログラム終了後の民間レベルでの交流が盛んになることを望んでいるし、実際幾つかの県で実行しており、カピジャメンバーの皆様にお世話になっているので、これからもよろしく願いたい。
- Q 9. 出生率の低下について青年達はどう思っているか。
- A 9. 現在出生率の低下はとても問題になっており、このままではいけないと思う。今、日本では働く女性が増加しているため、職場で働き続けられるための環境整備として育児休業法の制度化に向けて審議中であり、これら条件を整えば出生率も増えると思う。
- このセミナーも和やかに、楽しく意見交換が進められ、まだまだお互いにもっと話したかったが、時間がなくなってしまったので、今後とも、日本とインドネシア両国の友好が益々深まることを祈って終了した。

#### (5) バリ KAPPIJA メンバーとの交流

飛行機がバリに 1 時間遅れで着いたが、青年 5 人が迎えに来てくれた。ホテルまで車で送ってくれ、1 時間位ロビーで話した。

バリの KAPPIJA メンバーは 11 人で、活動をしている。

#### 3-4 ホームステイ実施状況

3 月 7 日、インドネシア訪問のスタートである。9 時に成田空港に集合、11 時ガルーダ・インドネシア航空機で一路ジャカルタに向けて出発した。旅行会社に勤めている私の感覚から行くと、ガルーダは遅れるという通念があったが、珍しく(?) 時間通りの出発。16 時 30 分、スカルノ ハッタ国際空港に到着した。

空港に着くと、3 月の日本では考えられない暑さと湿気、それと、異様な匂いが我々をおおった。この暑さで 7 時間 30 分の飛行時間による疲れ以上の疲れを我々に与えたが、空港に出迎えに来てくれた KAPPIJA のメンバーと共に再会を喜びあい、ホテルへ向かった。疲れてはいたものの久し振りの再会ということでその日の夜も 11 時近くまで皆で語り合った。